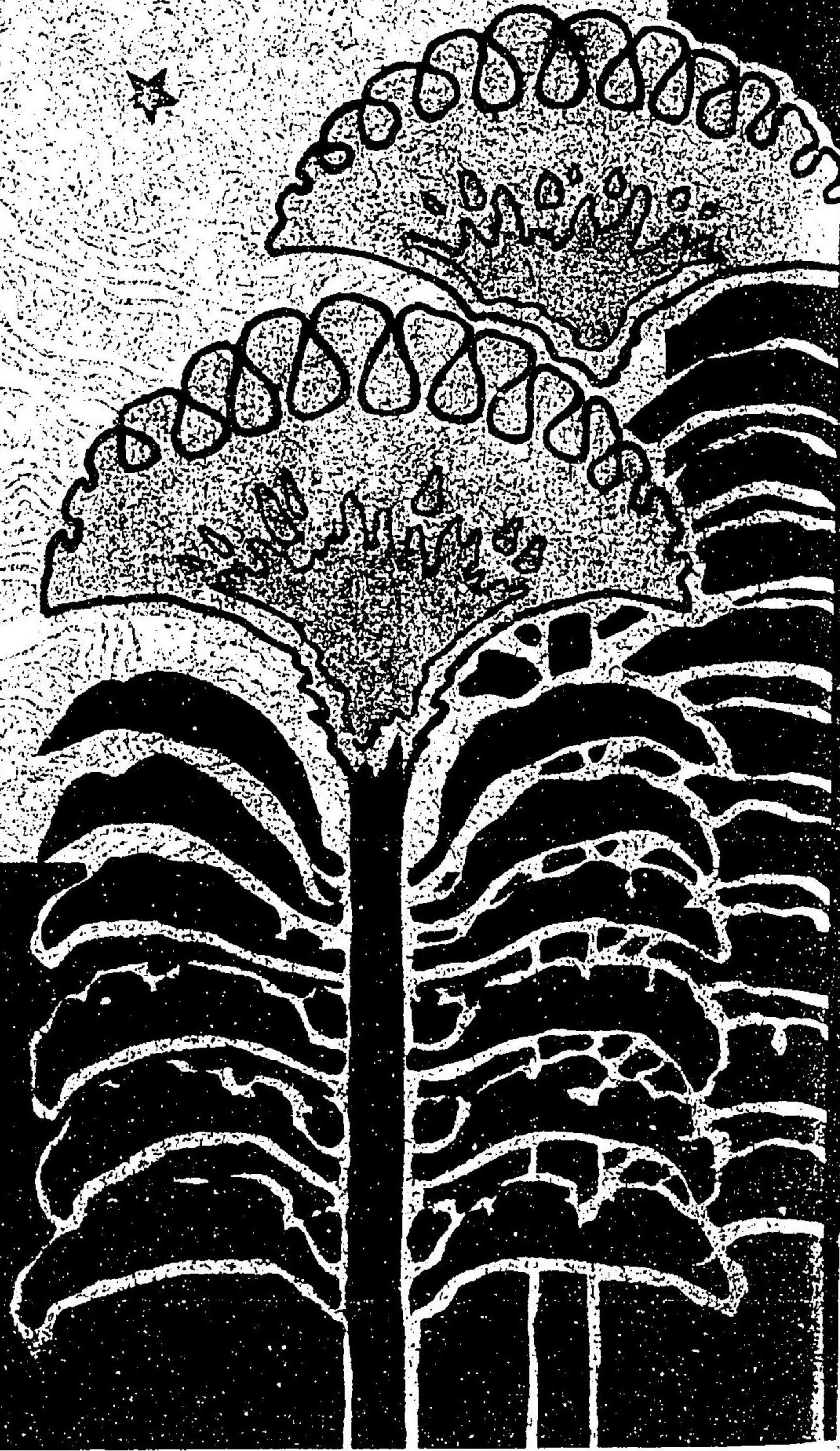


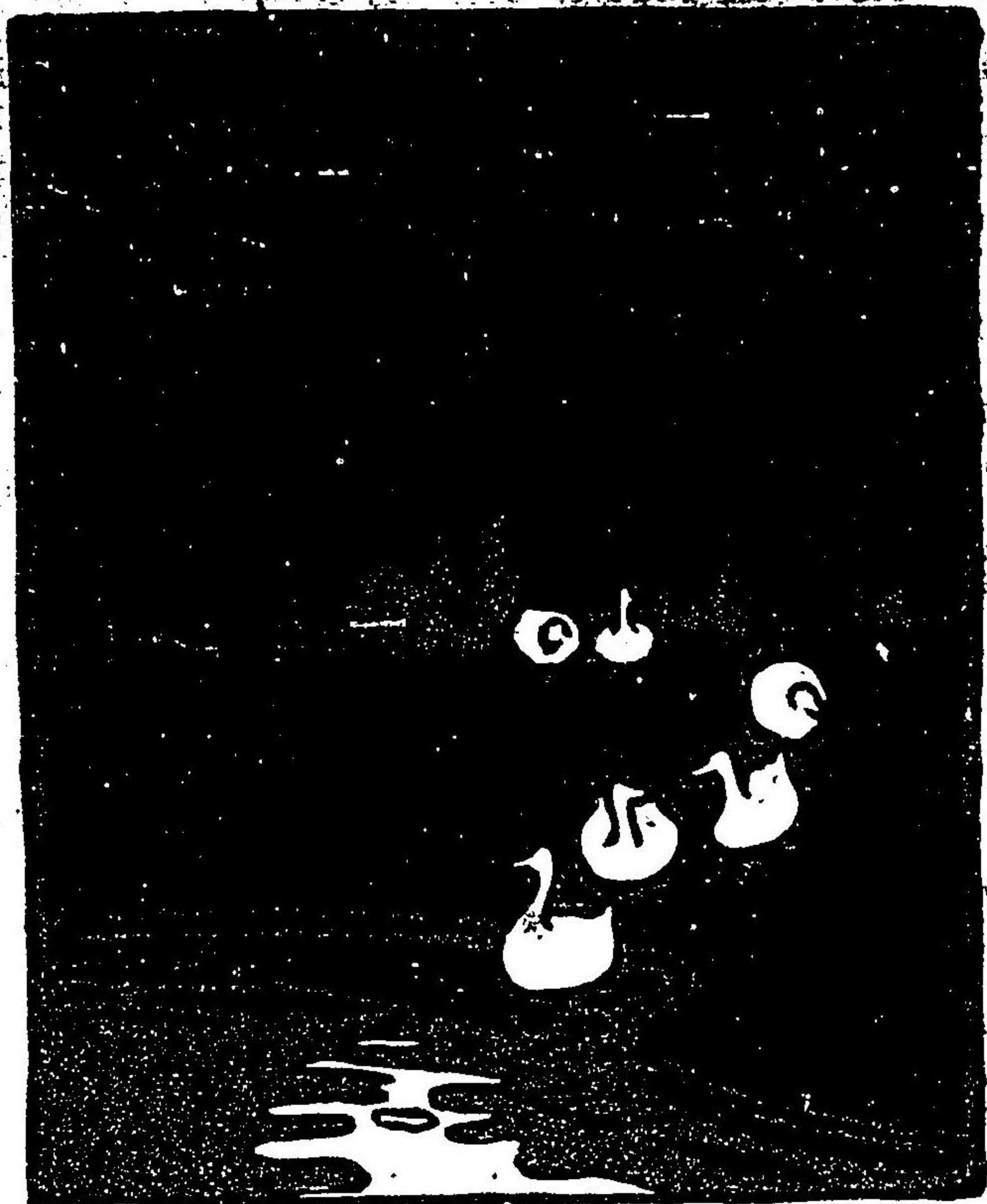
☆ 21-6R-98

329
33



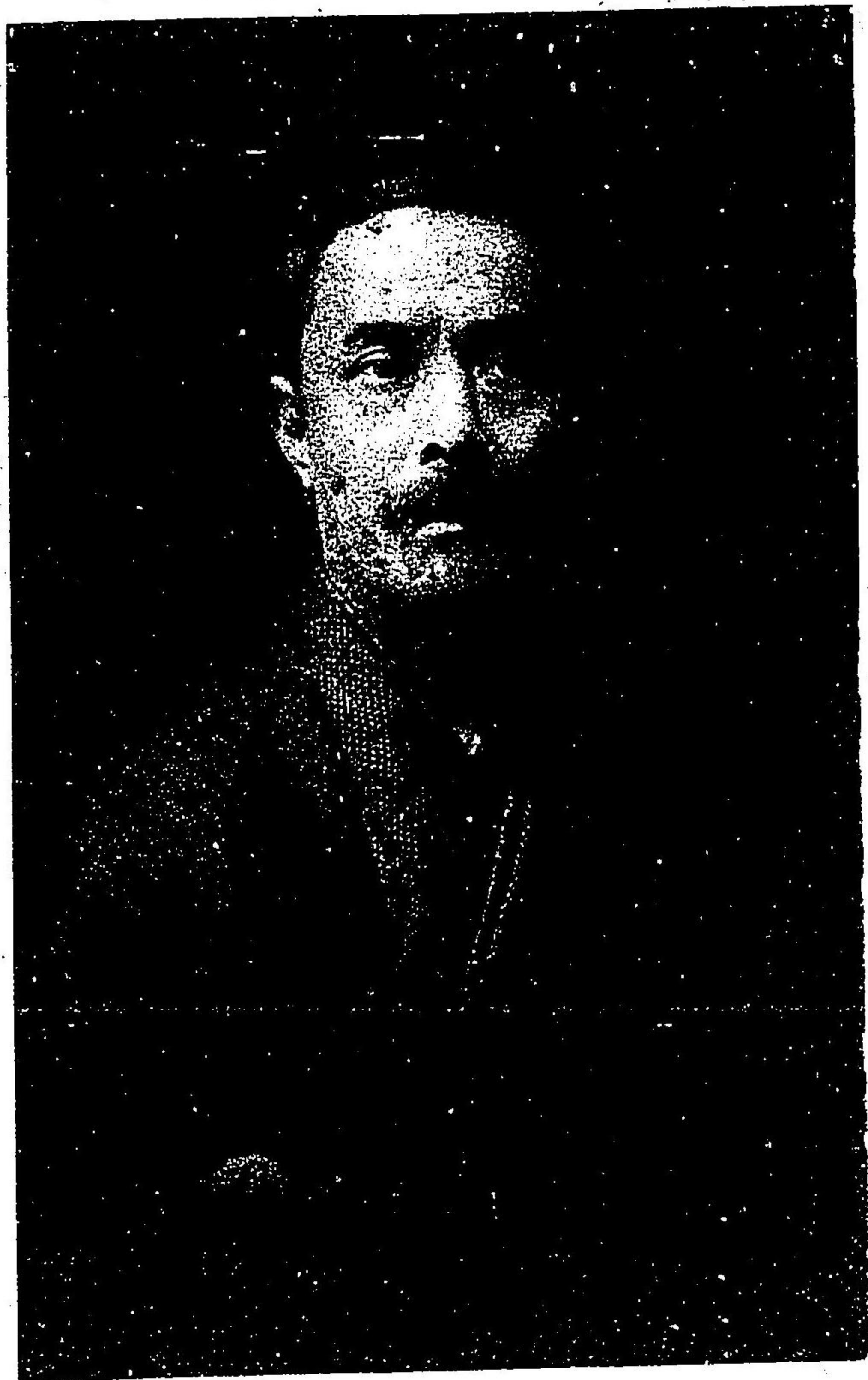
329-33

人



廣津柳浪著

明治
43. 2. 10
内交





廣津柳浪

麴町區飯田町四丁目の小路の内に、山田須壽と標札を掲した素人下宿屋がある。外見は長屋建じみた二階屋の、貸間の數五六を備へて居るのに、能く本業の方から苦情を持たない事だと、四隣では不思議の一つに爲て居た。戸籍調査の巡査の間には、御友人同志御自炊なさる筈のを、御頼を受けて御世話を致しますばかりで、私等母子は雇人と同事で御座ますと答へて、今日までは巧く云逃れて來たと云ふ事である。

二月初旬の、寒い朝の十時頃、茶の間の長火鉢の傍に、ねんね兒袴纏を被つても

尙ほ足りないのか、五布布圍を被けた脚爐に、其半身を潜らして居るのは、お須壽の母のお喜和だ。四十七にしては若く見える色白の女ではあるが、額が抜上つて、髪の毛の薄い髪を櫛巻にして、何處か體内に苦痛でも感えるのか、それとも此が平生なのか、眉を険しく寄せて、気が苛々しさうな様子。

お喜和は其邊を見廻して居たが、火鉢の抽匣に挟んで置いた、勘定書らしい紙片に其眼が止るまで、一入苛立つて來たらしく臺所の方を見返つて、饜食らしい大きな聲で、

「お須壽、鳥渡來てお呉れ。」

「何ですよ、阿母さん。」

臺所から蔽膝で濡手を拭き、出て來て茶の間を差覗いたのは、丸顔の色の白い、一寸愛くるしい廿歳ばかりの娘で、擬米琉の羽織の上に甲斐くしい禪掛である。

お喜和は差圖する様に天井を見上げて、

「まだ起きないのかい。」

「だれ。久野木さん。」と、迷惑さうに母を見る。

「どうさ。もうお前十時にもならラツてのに。」

「だって、お覺し申してもお覺なさらないんだもの。」

「それはお前の覺しやうが悪いらから。」

「だって、いくら呼んだつて、まるで感じが無いんだもの。張合が無いわ。」と、柱時計を仰いで、「もう起きてお居での時分かも知れないわね。」

「だから、行つて見るが可いちやアないかね。」

お須壽は禪を脱して、氣が進まなうな風を爲ながら、徐かに二階へ上つて行つた。

「本當に仕様が有りやアしない、彼様に世話の焼けるお客ツて、またと二人ありやアしないよ。勘定は二月も打擲かして、平氣なんだから呆れツ了ふよ。それで、朝寢坊で、時ならない時に御飯を食へてさ、順送に御膳時が後れるんだから、臺所は片付かないし、本當に弱らせられツ了ふ……。」と、ぶつ／＼云ひながら天井を見上げて、「勘定を取つたら、今度と云ふ今度は斷つて了はなきやア、もうとても道切れやアしない。」

二階を下りて來る音が爲たので、お喜和は疑乎と其方を見て居て、お須壽の顔を見るよ

「如何したかい。お起きなさつたかい。」

「駄目なの。」と、お須壽は鳥渡肩を翹めて母の向に坐り、「眼は明いてお居でなさるけども、今少時寝かしといてお呉れッて。」

「十時だッてお云ひなのかい。」

「云ッてよ。だけども、矢張駄目なの。起たつて、何を爲やうッて事もなし、寝て居たッて同」だッて云ふのよ。」

「本當に呆れッ丁ふよ。」と、お喜和は痢の爲に痙攣を發すのか、左の口尻を歪めくしなから、「今日は斷ッて遣らないうちやア。」

「斷るはこの事は無いでせう。」と、しげくと母の顔を見ながら、「昨夕催促した時に、明後日まで猶豫して呉れッてお云なすつて、阿母さんも承知お爲だつたでせう。」

「だけどもお前、」
母子の談話が漸く素からうとした時、表の格子戸の開く音が爲て、若々しい男の聲で、

「久野木君は御在宿ですか。」

「久野木さんですか。在宿ッしやいます。」

お須壽が立つて行かうとしたのを、お喜和は制して、

「構はないから、二階へ行つて貰ふが可いよ。そしたら、いくら何だつて、お起きかも知れないよ。」

「だけども、來た方が何人だか知れもしないのに、其様事を爲ちや悪くッてよ。」

お須壽が上口の障子を開けると、廿歳前後の書生體の男が土間に立つて居た。

男は中高ののツペリした顔に、にやりと笑を含んで、

「久野木さんにお目には掛りたいんですが、鳥渡取次いで下さい。」

お須壽は初めて來た人なので、疊に膝を突いて、丁寧な調子で、

「御名前は。」

「僕は小川と云ふんです。太田君の手紙を持って、使に來たんですから、其事を云つて下さい。」

「太田さんの御朋友で居らッしやるんですね。」

「そうですね。一寸で可いんですが、お目に掛りたいですから。」

「はう。」

お須壽はとん／＼と音を立て、二階へ上つて、北向の奥の四疊半の、唐紙の引戸を半開けて差覗くと、また窓の雨戸を閉めたまゝなのだから、室の内は眞暗で、雨戸の節穴から射込む光線に、蒲團から首ばかり出して居る久野木勝彌の姿がぼんやり見える。

「須壽さん、また起しに來たのかい。」

「御客さまが入來しッてよ。」

「僕の處へかい。」

「え、小川さんの方よ。」

「小川……其様男は僕は知らない。」

「太田さんの御手紙を持って入らッしたんですッて。」

「太田の手紙を持つて……さうか。ちやア彼の小川水鏡ッて奴だ。僕の大嫌な奴だ。」

「如何して。」

「如何してと云つて、須壽さんに話したッて詮様がない。太田の手紙を受取つて來たか

ら。」

「い、え。」すで能う御座んすから、御目に掛りたいッて。」

「小川が僕にかい。」

「え、。」

「眞平だ。まだ寝てるから、手紙だけ寄越せつて、取つて來てお呉れ。」

「それで可くッて。」

「ら、んとも。」と、勝彌は尙ほ起さなうな氣勢が無い。

お須壽が手紙を受取つて來ても、勝彌は尙ほ起きやうとせせず、

「須壽さん、雨戸を開けてお呉れでないか。」

「はう。」

お須壽が窓の雨戸を開け了つた時には、勝彌は寝たまゝ兩手を腕まで出して、太田の手

紙を翳して居たが、

「須壽さん、早く障子を閉めなくっちゃア不可い。寒い風だね。」

お須壽は障子を閉めながら、

「一寸で可いから、御目に掛りたいつて言つてらしつてよ。」

勝彌はお須壽へは返辭を爲す、太田の手紙を讀了り、一寸舌鼓をなし、

「太田の方も駄目か。」

お須壽は勝彌が眉を蹙せて考へて居る顔を、氣の毒さうに目成りながら、

「御返事はいゝんですか。」

勝彌は大きく首肯さ、

「承知しましたと云つて呉れたまへ。」

「彼方は。」

「病氣で寝てるから會へないと云へば可い。」

「ん。」

お須壽は二三歩行掛けたが、立戻つて

「もう起きて頂戴よ。ね、よくッて。」

勝彌が寝たまゝで笑つて居るので、お須壽は同じ語を繰返して、階下へ下りて行つた。

「貴方、御返事は上げませんが、承知致しましたと仰有つて下さいッて。」

「どうですか。」と、小川水鏡はじろくお須壽の顔を見ながら考へて居る。

お須壽は色の白い、中高かな眼に愛嬌のある水鏡を、何故に勝彌が嫌ふのかと、不思議に思ひながら、

「それにね、御病氣ですから御目に掛りませんで……何卒悪からずッて仰有つてました。」と終の方は氣の毒さに附加へたのだ。

「どうですか。」

お須壽の顔を凝乎と見た水鏡の眼には、溢るゝばかり不快の色が見えたが、直ぐに思返したのか、温和やかに、

「何卒お大事にと、よろしく仰有つて下さい。」

水鏡はさきより悪るげに去つて行つた。

「お須壽や。」

お喜和は直ぐにお須壽を呼んで、

「太田さんのお手紙は、如何な事が書いてあつたかね。」

「私知らなくつてよ。人様の手紙なんか、覗けやしないは。」

「だけどもお前。」と、お喜和は天井を見上げながら、「昨夜の事に、太田さんにも頼んで置いたからつてお云いだつたでせう。だから、今の手紙が其事かも知れないよ。」

「それは駄目らしくつてよ。」

お喜和は眼を睨つて、「詮様が無いわえ。」

途端に二階の縁側を、悠々と歩む足音が爲て、其が梯段の上に近くのだ。

「やッとお起きなすつてよ。」

お須壽が可笑さうに笑を含んで、梯段を見上げると、勝彌は双子の襦袢を被つて、楊枝を噛へながら下りて来て、お喜和に見合した眼を柱時計に移して頓狂聲を

「やア十時半だ。我ながら能く睡たもんだ。ははは、ハハ。」

「貴方の呑氣なものにも、本當に呆れて了う。」

「なか／＼呑氣どころぢやアない。これでも、」と、お喜和とお須壽とを、笑を合んだ無邪氣な眼で、當分に一寸見て、洗面場の方へ行つて了つた。

お須壽が勝彌の後から行かうとするのを、お喜和はせはしなく呼止めて、

「お前が行く事はないよ。お花が居るぢやアないかね。お前やお花が餘りぢやほやすもんだから、好氣になつて、私の云ふ事なんか、好加減に聞いてお居でなんだよ。」

「私は外に用があるのよ。」

お須壽がまた行かうとするので、お喜和は舌鼓を爲て、

「久野木さんがね、お顔がお済みでしたら、鳥渡入らしつて下さいッて——お母さんがだよ——さう云つてお呉れ。」

お須壽が遠所へ行つて了うと、廳で勝彌が手拭で顔を拭き／＼茶の間に入つて来て、お喜和と長火鉢を間に相對して座つて、濡手拭を猫板の上に置きながら、

「今日もなかく寒い様ですが、別に障は無いですか……顔色が餘り好くない様ですが。」

お喜和はいらくする氣を制へながら、

「難有う。如何も相變らずて困るんですよ。」

「今少し耐忍して、薬を飲んだら可いでせう。」

「御親切に難有う。」と、勝彌の方へ體を捻向けたお喜和の眼は、冷かに笑を含んで、

「何時治るツて的もないのに、便々と薬を飲んでられも爲ませんしね……それもね、有餘

つたお金でもあるんなら、貴方が仰有つて下さらないだつて、そりや薬も戴きますがね、

親子二人が斯様にして、人様の御世話を致して、まア、手数料位を戴いて、かつく遣つ

てるんぢやアね。」

「分つたよ、濟まないよ。」と、勝彌は手を上げてお喜和の語を遮つた。

勝彌は此山田に下宿してから、二年近くなつたのである。去年の夏までは、横濱で商業

に従事して居た兄から、多少送金して呉れたし、それで下宿料と、不足ながら小遣錢も遣

へて居たのだ。然るに、兄が商業の手違で一時に逼塞して、故郷の大分へ歸つてからは、

何を爲てなりとも自活の道を立てねばならぬ事になつた。両親には幼時に死別れ、兄の不

足勝の送金では、東京で規則立つた教育を受け難かつたので、つい學業を廢し勝になり、

送金の絶えてからは、雑誌に投書して、僅かに得た稿料を以て、かつく下宿料を支へて

來たので、それも此二月ばかりは心ならず滞はらす事になつたのであつた。

今でこそ、お喜和が勝彌を快らす思ふけれど、久野木さんは何處か確な處のある人だ。

早速偉い方にお成りかも知れないから、お前なんぞが決して不待遇を爲てはならないよと、

お須壽へ酷く話した位であつたのだ。勝彌は無頓着かと思へば、意外に綿密な處があり、

憎む事も強けれど、愛する事も強く、他の難を見れば、何を措いても救ひたくなり、自分

の力が其に勝つか敗るかなぞ顧みて居る様な氣風でないの、お喜和母子の爲にも、何か

と心配して遣つた事も、幾度か知れないから、お須壽は今日になつても、母が思ふ様に

勝彌を悪く思はないのみならず、却つて庇ふ様に爲て居るのであつた。

廿五歳には老けて見える方で、眼が大きくて清しいばかり、女の注意を惹きさうな點は

殆んど一點もないと云つて可い。唯遠慮なく無邪氣に口を利く間に、何か人に愛される所

があるのか、今日まで餘り人から憎まれた事がないさうである。

勝彌はお喜和の語が、漸く此方を攻撃しさうになつて來たので、手を上げて遮りながら、

「いや、濟まないく。お神さんに然様云はれると、僕は一言もないんですよ。」

「御口頭ばかりでせう。」と、如何にも冷りとせられる語調だ。

「いや、其然事は無い。」

「ですけれども、私には然様としまして思いません。」と、相手を凝乎と見て、「此様老婦が、而も卵巢水腫なんて業病に罹つてるんですよ、殊に御薬も載けないで。」

「だから、濟まないで云つてるんだ。」

「假にも然様思つて下さるんなら、朝も早く起きて下さつて、御奔走なさつて下さつたつて……。」と、お喜和は時計を見上げて、

「十一時近くまでも、平氣に寝て居らっしゃるんですもの、私だつて、さうくは貴方。」と、眼は一杯の涙となつた。

「濟まなかつた、實に濟まなかつた。」と、勝彌は平生よりは一入眞面目な語調で、「僕が呑

氣らしく寝て居たのは悪かつた。それは謝すですよ。併し、僕は決して放擲かして置くん

ぢやアない。太田の方と、今一つ他の方面に目的があるので、實は其返辭を待つて居たんです。太田の方は、不幸にして不結果に了つたけれど、今一つの方は、確かに或結果を、

満足でない迄も或結果が得られるだらうと思ふのです。それも今日か明日の中には……多分今日報告があらうと思ふですから……お神さん、私は虚構は云はんから、兎に角昨夜

承諾して下さつた通り、明日まで待つて下さる。」

お喜和は首肯しながら、「貴方は虚構を云はない方だつて事は、それは能く存じてますけども……もし其口が——今一つの口とかり、都合よく行かない様でしたら、」

「其時はまた其時の覺悟があるです。」

「其御覺悟して仰有るのは。」

「其は今云へない。」

「云つて下さつたつて、可さうなものですな。老婦を安心させて下さる御意なら、仰有つたつて可いちやありませんか。」

「御母さん、もう可いちやないの。其様事までも伺はないたッて。」

お須壽が箱髪の入毛の底を、指頭で掻き〜入つて来た。

お喜和はお須壽を睨みながら、

「また此子は口を出すよ。」

「だけどもね、久野木さんは、これまで一度だッて、好加減な事をお云ひなすつた事が無いでせう。だから、お云ひなさる通を信じてれば、其で可かアないかと思つてよ。」

「だけども、當事と何とかは、向から外れるッて云ふぢやないかね。」

「い、え、大丈夫よ。私何だか知らないけども、久野木さんに御目出度い事がある様な気がしてよ。」

「は、は。」と、お喜和は態とらしく笑つて、「お前が其様心持がするから、受合ふッて云ふのかい。」

「受合つても可いは。」と、お須壽は何と思寄るところは無いけれど、久野木が母に苦しめられて居るのが氣の毒さに、態と軽い語調で斯う云つて、「久野木さん、貴方乾度好事

が御在んなすつてよ。」

「何時です。」と、勝彌は何等かの暗示ではないかと思ふ體だ。

「今日か、明日か、多分、今日……でせうよ。」と、お須壽は愛らしく微笑むた。

「今日……さうですか。」と、勝彌は頼もしげにお須壽を凝眸と見て、「お須壽さん、當つたら、大いに奢るよ。」

「え、勝斗〜奢つて頂戴。」

勝彌は心地よげに立上つた。

「明日までには、御間達の無い様に願ひますよ。」

お喜和が念を押したのに、勝彌は首肯いて見せて、徐かに二階へ上つて行く、

「久野木さん、御膳は直さ召上るはね。」

「何時でも可いです。」

久野木が二階の椽側を、我居室へと歸り行く足音を聞きながら、お喜和は不機嫌な語調で、

「お前は不用る口出をするから不可いよ。私が切角談判を進めてたのに、好加減な事を云つて、ごちやまかしてお了ひだよ。」

「其様意ぢやなかつたけども、久野木さんが何だか御氣の毒で。」

「馬鹿をお云ひでない。何方が氣の毒だか考へて見るが可いよ。的事ッてものは、其時になつて見なくちア分らないもんだし、そんな事を的にして、十一時までも寝てるッて人は世間に膽斗ありやしなからうよ。それよりか、其ばかりを的にしないで、他を奔走して御覽な。巧く行きやア、兩方とも同時に出来る様な、機巧事があるかも知れないぢやないかね。久野木さんの話だと、太田さんに頼んだ方は外れたんだよ。今一つの方が、太田さんの方見たいに外れて御覽な、それッ切ぢやアないかね。だから阿母さんが、それが外れたら如何なさる意ですッて聞くとね、其時は其時の覺悟があるッてお云ひなさるぢやないかね。此方だッて、當に爲てるお金なんだから、其御覺悟ッてのを聞くとえと、今は云へないッて斯うなんだらう。」

「そりや詮方が無いは。何人だつても、其様時には其様ものなのよ。だからね、餘り無理

に聞くのは不可い事よ。」

「お前の様な事を云つてた日にやア、」

「阿母さん見たいな事を云つてたッて仕様が無いは。阿母さんは何よ、二月か三月か前までは、彼様に久野木さんを賞めてた癖に、頃日では宛然敵見たいね。」

お須藤に斯う云はれては、お喜和も何やら胸の奥がこそばゆい様で、鳥渡返事が出なかつたが、それでも、嘲ける様な語調で、

「此頃の様だと、賞めやうたつて賞められないぢやアないか。」

「阿母さん見たいな事を云ちや不實よ。」

「何が不實だよ。」

お喜和が躍起と成らうとした時、臺所から下婢のお花が大きな聲で、

「お嬢さん、肴屋さんが参りましたよ。」

「阿母さん、久野木さんには屹度好事があつてよ。あたし膽斗奮つて貰ふは。ほ、ほほ」

お須壽は二階まで聞こえる様な大聲で笑つて、ばたくと勝手の方へ駆出して行つた。

「彼兒は如何か爲てるよ。」

あさは獨でぶつ／＼口小言を云つて居た。

(一)

勝彌はお須壽が部屋掃除を爲て呉れ、飯の給仕も爲て呉れたので、綺麗になつた机の前に、一方縁の毀れた栗桐の箱火鉢を膝に挟む様に引寄せ、片臂は机に倚せて、何を極めて考へるでもなく、雑然と胸裏に涌いて來る事ごもを、ぼんやり考へて居ると、梯段を上る足音が聞こえて、應て唐紙を開けて入つて來たのは、號を紫瘦と呼ぶ勝彌の友人太田武弘である、

紫瘦は中折の帽子とインバネスを投出す様に置いて、本場大島紬の羽織に、京都出來の大島紬の額裏の綿入を二枚重ねて、白縮緬の帯には、黄金色の鎖がちら／＼と光つて居

る。勝彌には二歳ばかり兄らしい年輩の、丸顔の眼に愛嬌のある、小肥に肥つた男で、髪は綺麗に分け、揉上を刺落した痕が青くなつて居る。

紫瘦は勝彌が前へ出した火鉢に、手を押揉ながら焙つて、

「蒼川君、君は病氣で寝てるツテ話だツたが、もう治つたのかい。」

勝彌は微笑みながら、「なアに、何でもなかつたんだ。」

「だツて、小川が歸つて來て、久野木さんは御病氣ださうで、御目に掛れませんでしたと云つたつが、病氣でも何でもなかつたんだね。何の事だ。」と、紫瘦は笑出した。

「手紙を有難う。返事も上げないで失敬したつけ。」

「いや、君に氣の毒でねえ。君の事情は充分承知してるから、無理にもと思つて、随分手強く談じて見たんだがねえ、どうも何なんだ、作の内容其物よりは、作家の名に依つて價値を附けるんだからね、到底御話にならないんだよ。それに怪しからん事を云ふんだよ、貴方の御名をお加へ下されば……僕の號をなんだね、詰り合作とすればと云ふ意味なんだね……其ならば御相談に乗りませうツて、マア斯う云ふんだよ。」と、私に勝彌の顔色を窺ひ

ながら、「君には實に氣の毒なんだがね……其儘にして置いたんだが、君は如何思ふかね。」
「如何思ふかつて、」と、勝彌は屹度片影を見て、「其事に對する僕の所思かね。」

「さうさ。」と、瘦紫は鷹揚に首肯して、「僕は如何でも可いんだ。僕等如きものゝ名が君の急場を救ひ得るものならば、僕は寧ろ喜んで名を加へる意なんだ。」

「御好意は有難いが、僕は渴しても盗泉を飲まない流儀だ。」と、ギツぱり云切つた。

「盗泉とは。」

「他の名を利用して、自分の作物を、」

「いや、僕が承諾の上なんだから、」

「世間を欺くのは、何れにしても同一ぢやないか。僕は其様事は嫌ひだ。」

「君の氣象だから、多分さうだらうとは思つたかね、併し餘程急場の様な話だつたから、

一應話して見た迄なんだからね、君氣に掛けて呉れちや困るよ。」

「それは僕の方で云ふ事だ。種々心配を掛けて濟まんかつた。」と、勝彌は心持頭を低げて會釋した。

「いや、濟むも濟まんもないさ。お互に心配し合ふのが友誼なんだからね。僕に出来る事なら、如何様にでも奔走する意だ。何卒遠慮なく相談して呉れたまへ。」

「難有う。自然また、君を煩はす場合があつたら願ふから、其時はよろしく頼むよ。」

「あ、可いとも。」

其處にお須壽が茶道具を持つて入つて来て、

「太田さん、よく入來しつてね。」

「久野木君が病氣だつて云ふから、來て見ると、何でもないと云ふんで面食つてる所です。」

お須壽は失笑しさうに笑ひ出して、「あらさう。」と、眞面目な顔を爲て居る勝彌を見ながら、「小川さんて方が仰有つたんでせう。」と、また笑ふ。

紫瘦はお須壽が笑ふのには、何か仔細があらうと思ふので、自分も態々微笑みながら、

「お須壽さん、小川が何か失策でも爲たんですか。」

「いえ、其様事はありませんけども、お須壽は終まで笑ひながら、二人に茶を進める

と、階下へ行つて了つた。

「若川君、何を彼様に笑ふんだらうね。小川の奴め、また何か仕出来したんぢやないかね。」

「いや、左様ぢやないがね。」と、勝彌も有聲に微笑を漏して、「僕が小川に逢ふのが可厭だつたから、病氣で寝て居て逢へんと云はせたのさ。僕が假病をつかつたのを、君が正直に見舞に來たんだと思つたから、それで笑つたんだらう。可笑くも無い事を、仰山らしく笑ふのが、彼女の癖さ。」

「さうか。何の事つた。」と、紫瘦は一頻笑ひ了ると、眞顔になつて、「小川が頻りに君に逢ひたがつてるんだよ。」

「御免だ。」と、極めて素氣ない。

「大いに君を慕つて、ね、今日歸つてからも、非常に残念がつて、是非紹介して呉れろと云ふんだがね、君逢つて遣つて呉れまいかね。」

「御免だ。」

「君は其様に小川を好かないのかい。」

「好くも好かないもない。第一、君が何だつて彼那男を近付けるのか、僕はそれからして怪しからんと思ふ。」と、勝彌は見下す様に紫瘦を見た。

「何處へも行く所が無いと云ふから、詮方が無いから宅に置いて遣つたのさ。」

「君の宅に居るのか。」と、勝彌は冷かに紫瘦を見て、「君の妻君が能く承知されたね。」
「いや、大いに苦情が出たんだがねえ、どうも行處が無いと云ふものだから、辛じて妻を和めて、昨日から家に置く事にしたんだ。」と、紫瘦は敷嶋に火を付けて吸つて、煙ひたさうに瞬きしながら、「僕は氣が弱いもんだから、人に泣着かれると、何も斷れんで困るのさ。」

「さうかも知れん……或ひは然様かも知れん。僕にしても、薄命な人に同情する段になつたら、恐く君に劣らん意だ。併し、同情するのも人に依るさ。彼小川は何だ。君あれが人間か。」と、勝彌は居住を直して屹度紫瘦を見据ゑながら、「君、彼小川と云ふ奴は、師たる人の妻君を挑まうとした色魔だ、人非人だつて、君は僕に話した際に、非常に憤慨して居た

んちやアないか。其色魔を君の宅に置いて遣る……君と小川と何様關係があるか知らないが、君の妻君に對するだけでも、」

「何を云ふのか君は。」と、紫瘦も屹度眉を揚げて、「僕の妻が如何だと云ふのか。」

「いや、能く僕の云ふ事を聞きたまへ。」と勝彌は注冷の茶をがぶり一口飲んで、「君の妻君は、僕が悪意にして貰つてゐるから、能うく知つてゐる。實に貞淑な、今の世には珍らしい人だ。其貞淑な妻君に對して、爾倫小川如き者を宅に置いて、君は能く羞ぢないよ云ふんだ。」紫瘦は忽ち色を和らげて、

「いや、其點は實に困つたのさ。併し、君住所が無いと云ふ者を、」

「それは當然ぢやアないか——彼の罪が招いた、當に然うあるべき筈の自然の制裁ぢやアないか。其様奴に同情する君が抑も間違てるんだ。早速放逐したまへ。君が氣が弱くツて出来ないよ云ふなら、僕が出掛けて行つて宣告して遣る。」

勝彌は被つて居た襦袢を脱いで立上らうとした。

「蒼川君、君の様に激しても困るね。」

「何故」

「小川の云ふ所に依ると、其處にはまた酌量すべき事情があるんだよ。」

「馬鹿な。」と、勝彌は冷笑つて、「何様事情があつたとしても、恕すべき罪ではないんだ。」

「君は罪々ツて、頻りに小川を攻撃するけれども、其罪ツて云ふのがだね、よく研究し見なけりやア。」

「は、は、は、。また君の、例の研究——が始まつたね。は、は、は、。」

勝彌はさも可笑さうに笑つた。

「まあ笑はずに聞きまたへ。小川の事の如きは、大いに研究すべき問題なんだよ。君は其だから困るんだ。自分が可厭だと思ふと、深く研究もしないで、直ちに排斥しやうと云ふんだから、君の作物迄が兎角、現代の思潮に觸れないで不可のだよ。」

「或は然様かも知れん。」と、勝彌は聲こそ出さないが尙ほ笑を含みながら、「君の研究も可いさ。併し、君は唯本能と云ふ事だけに重を置いてるんだから、僕は一致するに到らないんだ。小川の罪に恕すべき點があるかも知れんが、それは本能慾——性慾ばかりを土

臺にして見てるからだらうよ。」

「其が悪いと云ふのかね。」と、紫瘦は片頬に笑を含んだ。

「君は私の対象が人生だって、よく僕に突掛つて来るが、人生と云ふものは一個人ぢやなからうよ。君の我、僕の我、小川の我、此の家のお須壽の我、階下の老婦さんの我、森所のお三さんの我、これ等が皆人世中の一個として生存して居る者を見るんだね。此等の我其者が、我先づ滅びようと思ふ者は無い筈だせ。さうすると、おのゝ其生存の爲に活動しなきゃアならないだらう。そこで其時代の生存に最も適した者は榮え、最も不適当な者は滅ぶ事になるだらう。そこで、性慾と生存慾と……君が何時も唱る性慾の赴くところ何を爲すも可なり、現世の道德だの、宗教だの、習慣だのと云ふものは、第二義のものであつて、其等に頓着するには及ばないと云つては、結局生存して行く事が出来ないから、如何にせば本能にも多少の満足が得られて、同時に生存して行く事が出来やうかつて云ふ所になりやアせんかと思ふんだよ。君はさうは思はんかね。」

紫瘦は勝彌の語の夾から、稍耳を傾けて居たが、此時粧うたかを見ゆるまで、一入冷然

として、

「君見たいな事を云つたつて、現代の道德や宗教に支配されて、それで満足してられるものかね。それが出来る位なら、煩悶も何もありやアしないよ。問題は、其様に簡單ぢやアないんだ。」

「無論さうだ。併し、煩悶するなら、如何に爲ば現代の道德や宗教やを破つて、それで生存にも適する第一義が立て得られるだらうと思ふ所に、大に煩悶して貰ひたいと思ふんだ。」

「それが出来る位なら、其が君」と、紫瘦は急込んで斯う云つたが、忽ち悄然として、「我々の及ぶ所にあらすだからねえ。」

「及ぶ所にあらすと云へば、其までだ。併し、何等かの準備をせんきやならない筈だらう。君は其だから、唯人の子を毒するまでの事しきや出来ないんだ。」

「人の子を毒するとは、何人がだね。」と、憤然として相手を見上げた。

勝彌は何時になく、紫瘦の眼にも傲慢なりと見ゆる様な態度で、

「何の準備もしないで、舊來の道德宗教から、世人を解放した結果を、君は如何見るかね。適切な例は、近來の貴婦人社會の墮落を見たまへ。何の準備もしないで、舊道德から解放した結果ぢやないか。慈善會だとか何だとか、美しい名の會は、貴婦人社會の墮落を速かならしめたが、君等の思想は、一般の青年男女を墮落の淵に導くものなんだ。」

「君は充分研究もしないで、」

「或ひは然様かも知れない。けれども、君だつて、何か準備しなきゃならない事は感じてるだらう。無論完全な物の出来よう筈は無いが、曲形の物でも……もう、止さうよ。難かしい談話ばかり爲て居たつて詮様が無い。けれども、小川は早く放逐するが可いよ。僕は君の命名を毀けられない中に、一日も早く實行したまふ事を望むんだ。」

「小川の事なんぞ、如何でも可いさ。」と、紫瘦は一人躍起となつて、「僕を批難する位だから、君には君に準備が出来てるだらう。」

「さうさね。」と、勝彌は片頬に笑ひだ。

「あるのか。無いのか」と、紫瘦は覺えず兩手に力を入れて、勝彌の膝に火鉢を押し付けた。

「紫瘦君、其様に押さないだつて話すよ。」

勝彌が莞爾笑ふと、紫瘦も苦笑しながら、

「つい熱心になり過ぎたんだね。」

「僕は人生に陥缺があり矛盾があるのが、これが自然其儘の形でね、人は其間にあつて、生存慾と本能慾の満足を得ようと思つて、互に奮闘し、適する者は榮え、適せざる者は滅び、其處に不斷の進歩ありと云ふだけの事だらうと思ふんだよ。だから、人は努力すりやア可いんだ。努力して生存慾と本能慾の満足を得れば、それで充分ぢやないかと思ふね。」

紫瘦は覺えず失笑して、

「其では強者勝と云ふんだね。」

「まづ然様だ。」

「強者勝の本能満足と云ふ事になつた日には、禽獸の社會を人間界に持込まうと云ふんだね。」

「いや違ふ。君は本能にばかり重を置いて、生存と云ふ事を忘れてるから不可い。満足と云

つたつて、絶對の満足と云ふものは、到底得られるものでないだらう。強者と云つたつて、絶對の強者が人間にあらう筈が無いだらう。だから、生存慾と本能慾との調和の爲に、他の自由を奪はない、人の物を偷まないと云ふ二つに、努力を加へると三つになる。此三つを奉じて奮闘するんだ。此が僕の主義なんだ。君、極めて簡單だらう。」と、勝彌は大口を開いて笑つた。

紫瘦は無論勝彌の説に服する筈が無く、馬鹿なと云はぬばかりの調子で、

「君は其で満足なんだね。」

「絶對の満足とは、無論云はないかね、専心努力して、人の自由を奪はず、他の物を偷まないと云ふ主義で、世界の人が働けば、其處に其時代〱に適する道徳も生るれば、教育も起らうと云ふもんだ。」と、忽ち語調を一變して、「君、此方が君等の主義よりいくら善いか知れないんだせ。逡通する奴は、自分は満足するかも知れないが、一方に一人の失戀者を作るんで、單に人の物を偷む奴よりも、尙ほ一層憎むべき者なんだ。小川は今日直ぐに放逐しなきゃア不可よ。」

「君は其で満足してられるんだから幸福だよ。は、は。」

紫瘦が下墨ひ様に笑つた時、窓の下から聲を掛けた者がある。

「蒼川君、居るかね。」

「林君か。居る〜。」

「好結果だ。」

「えッ、好結果。」

勝彌が覺えず立上つて、窓の障子を開けて差覗くと、もう林の姿は見えず、格子戸の開く音がしたかと思ふと、もう梯段を駆上る足音が聞えた。

「久野木君〜。」と、林は唐紙を開けて、紫瘦が居るのを見るより躊躇ひながら、「太田君が来てお居でなだね。」

「構はないから入りたまへ。」

林は勝彌に二歳ばかりの弟で、氣輕さうな男で、紫瘦と斜に對して、勝彌の側になつた。

勝彌は心の満足を包み得ず、満面に笑を湛えて、

「林君、君擔いだんぢやアないかい。」

「戯言云つちや困るよ。君を擔いで喜ぶ僕ではない筈だ。」

「いや、失敬〜。」と、勝彌は林が紫瘦に遠慮してゐるらしいのを見て、「君、構はないから話して呉れたまへ。」

「では、」と、林は懷中して居た小さな風呂敷包を取出し、勝彌の前に置いて、「先づ五十圓受取つて来た。」

「五十圓か。難有う。」と、勝彌が風呂敷包を凝と見た眼には露が宿つて、「林君、君の盡力は實に感謝に絶えんよ。」

「其様事は無いさ。僕の力はゼロだが、君の奮闘の結果さ。」

「原稿が賣れたんですか。」と、紫瘦は風呂敷包から林の顔へ眼を轉した。

「さうです。」と、林も語調は冷かだつた。

紫瘦は勝彌に對ひ、

「蒼川君、好鹽梅だつたね。」

「實に好都合だつたよ。大いに奢らう。」

「なに、奢るには及ばないよ。尤も、林君は別だがね。」

林は紫瘦の語に可厭な顔を爲て。

「蒼川君、僕は今夜出直して来るよ。」

「待ちたまへ、今一緒に掛けるから。紫瘦君も附合つて呉れるだらうね。」

「僕には其資格が無いんぢや、ないか。」

「資格も糞もあるもんかね。僕が願んだ。」

勝彌は襦袍を脱いで、袖に繼のある紡績緋の羽織を着、古びた烏打帽子を被つて、風呂敷包を解きながら、威勢よく梯段を下りた。茶の間を差覗くと、お喜とお須壽の母子が、長火鉢を差向にして居たが、齊しく勝彌を見上げた。

「須壽さん、今お禮を爲るよ。」

「んん。」

母子は吃驚して顔を見合せる。勝彌は續いて下りて来た二人を見返り、

「先に出て居て呉れたまへ、今直きに行くから。」

一人茶の間に入り、お喜和に對し膝を突いて、既に解き掛けて居た風呂敷を開けると、五圓札が十枚見はれた。

眼を睜つたお喜和に向ひ、

「お神さん、此内三十五圓だけを、僕が歸つて来るまで預つて置いて呉れたまへ。」と、七枚だけ猫板の上に置き、二枚は無雑作に袂の中へ捻込み、残つた一枚をお須壽に渡さうとしながら、

「須壽さん、これは先刻約束の御禮だよ。」

「えッ、私にッ。」と、お須壽は手を出し得ないで、「ぢやア、御都合の好い事が御出来なつたんだはねえ。」

「うう。」と、お須壽を見て莞爾して、「須壽さんが先刻、今日屹度好事があると云つて呉れた時ね、僕は彼時何様に嬉しかつたらう。其辻占が的中して、林君が今家外から好結果

だつて聲を掛けた時も、僕は夢かと疑ふまで嬉しかつた。僕は今から林君を奮に出掛けるから、須壽さんは、阿母さんとお花に、何か奮つて遣つて呉れたまへ。では、鳥渡出掛けて来る。」

母子が何を云ふ間もなく、勝彌は友の跡を追うて出て行つて了つた。

お須壽は勝彌を見送つて茶の間に歸つて来て、

「阿母さん、だから私云はない事ツぢやないは。久野木さんは何様に困つて居らしたツて、弱らないで働く方だから、屹度切抜で行らッしやるから、二月や三月、御都合の悪い事があつたつても、頭日見たいな待遇を爲ちや悪くつてよ。」

「それは然様だけれども……まア可いさ、斯うしてお金は預つたし、お前には禮を下さるしよ。」

「私、此お金は御返ししてよ。」

「可いぢやアないかね、下さつたものだから貰つて置いたツて。」

「いゝえ、私返してよ。戲言に云つた事が中つたばかりで、禮なんぞ貰つちや御氣の毒だ

もの。』と、寝平と考へて居る。

お喜和は五圓札を七枚、一枚一枚敷へて火鉢の抽匣の奥深く藏ひながら、

「お前が御返したと、彼様構はない方だから、直きに浪費つてお了ひなさうよ。』

「だから私考へて居るのよ。』

「兎に角、阿母さんが預つて置くよ。』

「他の事に遣つちや不可くつてよ。』

「だれがお前のお金なんか遣ふものかね。』

階下の奥に下宿して居る兒玉權二と云ふ醫學生が歸つて來たので、お須壽は其方へ火を運びに立つて行つた。お喜和は一人になつても、此頃になく莞爾して居る。

(三)

勝彌の部屋の前に、急歩に來たのは、手に新聞紙を持つたお須壽である。勝彌が例の朝

寢坊に、お須壽は今朝の七時頃から今九時近くまで、幾度覺しに來たか知れない。平生なら九時が十時にならうと、此様に歩を運ぶのではないが、今朝配達して來た新聞紙に、勝彌が作の「親の悶」と題する小説の第一回が掲げてあるから、少時も早く當人に見せて喜ばせたいからなのだ。

「まだ寢て居らッしやるは。』
と差覗いて、

「久能木さん、早くお覺きなさいよ。貴方の小説が新聞紙に出て居てよ。小説が新聞紙に、」
と、聲に力を入れて、「小説が新聞紙に出て居るんですッてのに……久能木さん、久能木さん〜。』

お須壽の聲が稍耳に通じたのか、うんと寢返をうつた。

お須壽は此處ぞと一入聲に力を入れて、

「貴方の小説が新聞紙に出たんですよ。』

「煩擾いなア。小説なんか滿らない。あゝ睡い。』と云つたのも、夢でも見てる様な語調

だ。

「貴方の小説ですッて云ふのだ。」

「うるさいッ。」と、頭から抱巻を被つて了つた。

「あら如彼だ。彼様に睡いものか知ら。」

お須壽がまた出直す氣で、階下へ行かうとするを、勝彌の隣室から呼止めた者がある。

「おい、お須壽さん。」

「はい。何か御用。」

お須壽が障子を開けて入口に膝を支くと、

「鳥渡お入り。」

にこ／＼しながら手招をするのは、某私立病院の醫員兒玉權二と呼ぶ廿七八歳の男だ。地のへばった黒七子の五ツ紋の羽織を着て、髪をハイカラに分け、鍍金縁の眼鏡を掛けて居る。

お須壽は下宿人の内で、勝彌が一番好きで、權二が一番嫌ひなのだから、權二の用は多く

下婢のお花に足させて、自分は成丈け其部屋へ行かない様に爲て居る。權二は其を意地になつて、お須壽／＼と附廻すのを、お須壽は何時でも逃廻つて居るのだ。で、權二が手招をしても、入りさうにもせず、

「何か御用ですか。」

「用があるから、まア入りたまへ。」

「御用なら早く仰有つて下さい、……何ならお花を寄越しますから。」と、立たうとする。

「鳥渡其新聞紙を見せたまへ。久能木君が書いた小説が出てるとか云つたつねね。」

「え、出て居てよ。」と、お須壽は得意らしく、「今日から毎日出るんですよ。」

「鳥渡見せたまへ。」

「久能木さんに伺はなくつちやア悪う御座んすは。お後でお借りなつたら可いでせう。」

と、お須壽は立上つて、「今、お花を寄越しますよ。」

「須ちゃんは意地が悪いね。覺えてお居で。」

「い／＼忘れてよ。」

お須壽はばたくと駆出して、階下の茶の間に来ると、母のお喜和が例の如く、火鉢と炬燵の間に、寝兒絆纏を被た體を窮窟らしく埋めて居る其前に坐つて、新聞紙を炬燵の上に置き、縫掛の男物の羽織を取上げた。

「まだお寝ッてらしてよ。」

「い、やね、別に御用が御有んなさるんぢやアなし、無理にお覺し申さない方が可いよ。」と、お喜和が勝彌に對する感情は彼日以來一變したのだ。

「だけでも、早く知らして上げたいは。明日の新聞紙から小説が出るんだッて、昨日ッから待つてらしたんですもの。」と、セッセと羽織を縫つて居る。

お喜和はお須壽がいそくと縫つて居るのを見て、微笑みながら、

「お前の見立が可かつたから、久能木さんに屹度能くお似合ひだよ。」

みしりと梯段に音が爲たのは、權二が下りて來たのだ。

お須壽は權二の姿を見るより、臺所を見返りながら聲高に、

「お花や、兒玉さんが御出掛なさるから御履物を出してお呉れ。」と命じて置いて、自分は

態と深く垂頭して針の運を速くした。

「なに出掛けるんぢやアないよ。」

權二が長火鉢の傍に坐りさうなので、お須壽は眉を皺めて、

「ぢやア、御手水。」

「なに然様でもないんだ。」と、權二は火鉢の前に坐りながら、「阿母さん、今日は如何です。昨日の薬を飲んだでせうな。」

「はい、いたいましました。」と、お喜和は頭を少し下げた。

「一月も續けて飲んだら可いでせう。明日病院から原料を持つて來て置いて、僕が調劑して上げる事に爲ますよ。」

「難有う御座ます。」と、お喜和は炬燵の掛布団に頭を附けて禮を述べ。

お須壽は殆んど二人の談話が耳に入らぬかの體で、頻りに針を運んで居る。

權二はお須壽に眼を轉つて、

「お須壽さん、大層御勉強だね。男の羽織の様だが、何人の羽織かね。」

お須壽は返辭をせぬ。お喜和が傍から微笑みながら、

「久能木さんの御羽織が餘り見ともないから、調べて上げるんだつてね貴方、柄も自分で見立て、来たんですよ。」

権二は聞くと共に可厭な顔を爲したが、じろりと憎くさうにお須壽を見て、語調だけは調戲らしく、

「道理で熱心だと思つた。久能木君が何だね、小説が新聞紙に掲る事になつたので、急に御盛粧を爲やうてんだね。は、は。」

お須壽は可厭な奴と云ひたさうに、怒つた眼で鳥渡睨んで、直ぐにまた垂頭いた。

「ふ、む、此か。」と、権二は新聞紙を取上げて、一面の小説欄に眼を据え、「成程、親の悶」久能木蒼川とあるね。」と、二三行も讀んだかと思ふと、投出す様に新聞紙を置いて、「此様小説を書いて、二圓か三圓の擬大島紬の羽織を着りやア、天晴紳士の意なんだから可い。は、は、は。」

「何人が紳士の意ですつて。」と、お須壽は針の手を止めて、屹度権二を見て、「久能木さ

んがですか。」

「なアに大島紬ツて佳い物だと云ふ事さ。擬と來ちやア尙更さうだ。鳥渡見が善くツて、誤魔化せるんだからね。」

「え、さうなのよ。擬で誤魔化す意なのよ。何せ私が上げるんですもの、誤魔化しもく大誤魔化し物なのよ。」と、お須壽は眼に涙を持ちながら、「兒玉さん見たいに七子の紋付なんか着てる方が、誤魔化し物の傍に居らッしやるかね、威れて誤魔化し物に見えてよ。」

「何だねえ、此兒は。」

お喜和が制めても、

「兒玉さん、貴方の七子が擬物に感れちや御氣の毒ね。貴方の七子は佳い七子だは。本當に紳士に見えてよ。阿母さん、紳士を見たまやア兒玉さんを見るが可いは。」

我兒ながらも憎くなるほど嘲けるので、お喜和は屹度お須壽を睨んで、

「お黙り……お客さまに失禮な。何て口の利きやうです。」

「だつて私が。」

「お黙りッては。」

「阿母さん、叱つちや不可い。あは、と、取つて付けた様な笑方を爲て、「久能木先生は幸福な譯さね。いや、また御叱を受けない中に引退るとするかね。」

「貴方、何卒御氣に爲さらない様にね。私から御詫を致します。」

お喜和が詫びたのを機に、権二が梯段を上ると引違に、勝彌が寝衣に襦袢掛を下りて来た。

「だから、私嫌ひなのよ。」

お須壽が斯う呟きながら、権二の後姿を見上げる意で見た眼は、はたと勝彌の眼と見合ふと、はッと顔を赧めて「さきさきしながら、

「あら、お覺きなすつて。」

勝彌は楊子を啣へながら、

「何人が嫌ひなんだ。僕ぞかい。」

「あら可厭な。」と莞爾して、「御隣室のね、ほらッ。」

「巧く誤魔化しちゃったね。」

「あらッ、酷くつてよ。」と、態とらしく睨む。

「須ちやんや、新聞紙をお上げでないか。」

「あ、然様〜。」とお須壽は其處の新聞紙を取上げ、如何にも嬉しそうな笑を浮べて、

「貴方の小説が出て居てよ。」

「さうかね。」と、勝彌も流石に包み得ざる嬉しさに莞爾して、取手も遅しと新聞紙を開きながら、

「今持つて来たのかね。」

「い、え、今朝早くなのよ。」

「さうか、早く覺して呉れ、ば可いのに。」

「あらッ、私幾度覺しに上つたか知れないことよ。ねえ阿母さん。私が一番後で覺しに上つた時なんか、煩擾いッて抱巻を被つてお了ひなさつてよ。それなのに、覺して呉れば可いなんて、酷くつてよ。」

「どうか。勘忍したまへ〜。」と、何時も此様時に見する愛嬌のある笑顔を爲ながら、心地能げに、自作の小説を讀むのだ。

「御免。」と、格子戸の外から男の聲。

「はい。」と、お須壽が答へる。

「兒玉さんは御在宿ですか。」

「はい、居らっしゃいます。」と答へて、小聲で、「阿母さん、柏木さんて方の聲よ。」

「どうかい。彼の御綺麗な、華族さまの若様見たいな。」

「のう。」と答へる。

格子戸を開け、上口の障子を開け、上つて来る足音がすると、茶の間を差覗いた者があゝ。勝彌は見返つて顔を見合せて覺えず眼を睜つた。

白子からも見ゆるまで白き面に、化粧を爲たかと疑はるゝまで、ほんのり櫻色の美しき、濃き眉も殿つからず、一重睡ながら清しき眼と、締つた口元とに笑を湛へて、

「兒玉さんの室へ通りませう。」

「は、わんせ。」

お喜和が答へると、男は足音靜かに二階へ上つて行つた。

勝彌は自分の小説を讀むのも忘れて、

「須壽さん、今の人は、何だい彼は。」

「兒玉さん處へ時々来る方ですの。」

「どうか。僕は初めて見た。實に綺麗な男だね。驚いちやつたね、實に。」

「本營に綺麗な方です。兒玉さんの御話だと、もと旗下の方ださうで御在ますよ、彼方の御父さんが。」

「どうですか。何だか知らないが、實に綺麗な男だ。」

「綺麗過るは。私何様男嫌ひよ。」と、お須壽は勝彌の顔を見る。

「男らしく綺麗だから佳い。僕は好きだ。何歳位だらう。」

「十九ですッて。妹の方が十六でね、それは美人だッて、兒玉さんが能く惚けてよ。」

「兒玉が惚けてる。」

「それは可笑い事よ。此着物も美都子が縫つて呉れたんだ、此臂突も美都子が編んだんだツてね、それはもう大變なのよ。今着て居らッしやる彼のへんべらのお羽織ね、彼も彼方の妹さんがお縫ひなさつたんですツて。おほい。」

「僕も須壽さんに羽織でも縫つて貰つて、大いに惚けて遣るかな。」

「あら可厭な。」

お須壽とお喜和とは共に縫掛の羽織を見返つたが、勝彌は氣も付かないで、新聞紙を懐へ振込んで、臺所へ顔を洗ひに行つて了つた。

(四)

権二は鹿爪らしい顔を爲ながら、思餘つた體で垂首れて居る柏木元二に對ひ、

「其様に堅くなつてないで、もつと火鉢の傍に寄るが可いよ。」

元二は垂首れたまゝ、兩手を長く伸して火鉢に竝した。権二は元二の白く美しく、臍を凝

乎と見ながら。

「君の腕が黒くツて、もツと穢なきやア、其様に心配する事なんか發らないんだけれども、宛然女なんだから困ツ丁よ。」

元二は消しい眼に曇をもちながら見上げて、

「僕を女だと仰有るんですか。」

「怒つちや不可よ。君が女見たいに綺麗だから困る。女見たいに綺麗に〜と育てられたから困ると云ふんだ。」

元二は顔を赧くして垂頭いて了つた。

「併し、其も君ばかりが悪いと云ふんぢやないよ。君よりか、寧ろ君の御母さん……まア御母さんが悪いと云つて可いんだね。君の御母さんは君を自慢なんだ。祖母さんも自慢なんだ。御父さんも然様なんだ。だから、君が綺麗に育ちさへすれば可い、綺麗になれ〜ツて育てたんだから、生來美しい君が、愈々美しくなつたから溜ない、祖母さんも御母さんも御父さんも、君が可愛くツて〜、君の云ふ事だと云ふと御無理御尤、何でもはい〜

で通したもんだから、終に滞りなく今日の君に育上げて了つたんだ。」

「或ひは然様かも知れないんです。僕は然様は思はないんですが、貴方が然様だとお云ひなさるんなら其に爲て置くですが、」と唾を飲んで、「僕が今日伺つたのは、其様事を聞いためではないんですから、」

「其は解つてるさ。けれども、君が今年廿歳にもなつてながら、今日逆境に立つてられる君の両親の脛を嚼つてるなんて……まア怒らないで聞きたまへ。僕が君に苦言を呈するのは、君の前途を思ふからなんだよ。」

権二が紙巻裏に火を點けようと語を断つたので、元二は膝を進めながら口早に、

「ですから僕も今後は大いに働いて、多少両親の負債を軽くしたいと思ひますから其で、」
「大いに賛成だ。」と、権二は遮る様に高聲に斯う云つて、「けれども君に辛棒が出来るか

501

「出来るだけ辛棒する意です。」と、元二は屹度権二の顔を見た。

「如何だかねえ。疑問だねえ。」と、にやにや笑ひながら、「出来るだけの辛棒なら何人でも

爲さうだね。君のは、それも積なんだからねえ。」

元二はまた真紅になつて垂頭して了つた。

権二は元二の此様を見ながら、氣の毒とも思はぬ様子で、

「元二君、僕は君の宅に三月も一緒に居たから、君の性質を能く知つてるんだがね、君には根氣が無くツて飽ッばいから困るんだ。君が中學の一二年さへも満足に修め得なかつたのも其なんだよ。それも君はかしが悪いんぢやアない。其様場合に君を訓誡する人も無きやア、激刺する人も無かつたもんだから、今日では其が癖になつて了つたんだ。君が何を遣たつて、一月と続いた事は無いだらう。」

元二は顔を上げ得ない。

「君が美しく生れたのが悪いんぢやアないが、君に見惚れて何にも爲せなかつた御母さんや御父さんが悪いんだ、まア。」と、権二は口元に嘲ける様な笑を浮かべながら、「先日僕が君の宅へ行つた時も、亦例の自慢話が出たんだよ。君が透綾の帷子を着て何處とかを……さうだ。池ノ端の仲町を通つたつて。すると、方々の御神さんや娘が、店頭へ駈出して來て見た

つて云ふんだ。御母さんから此話を聞かされること、さうさ、既に七度云ふに到つては、驚くぢやアないかね。」と、高聲に笑出した。

元二は穴があらば入りたくも思ふのであらう、體を固くして、腋下は冷汗に氣味がわるいほどだ。

「未だ茶も遣らなかつたけね。」

「自由に戴きますから。」と元二は尙ほ體を固く爲て居る。

「まア可いぞ。」

権二は茶を注いで元二に進めながら、

「美都ちやんは如何して居たかね。君が家を出る時居たかね。」

「妹ですか。家に居たやうでした。」

「何を爲て居たかね。また御祖母さんの傍で、昔の御自慢か何か聞かされてたんだらう。」

「如何でしたか知りません。」

「君の御祖母さんにも困るねえ。美都ちやんの爲には御祖母さんが居ない方が可いんだけ

「も。」

「さうかも知れません」と、元二は唯受答を爲てると云ふだけの語調だ。

権二は何を考出したのか、俄かに嘲る様な微笑を含んで、

「美都ちやんは何だつてね、洋行した人でなきや嫁らないんだつてね。」

「何人が其様事を云つたんですか。」と、元二は首を傾げた。

「御祖母さんがさ。僕が聞いた時に、御祖母さんが確かに然様云つたんだかね。」と、元二を見てにや／＼笑ひながら、「君は如何思ふかね、今日の君の家の境界でだね、洋行したほどの男が貰へるだらうかね。僕は疑問だと思ふが、君は如何思ふね。」

元二は黙つて居る、

「僕が御祖母さんに聞いた時斯う云つたよ……兒玉さん、貴方が大學を卒業なすつた上で、洋行してお居でたつたら、美都子は貴方の物ですけれども云つてね……其後の云方が僕は大いに癢に觸つたんだ……如何にも輕蔑したやうに異様な笑を含んでた、洋行した方になら、貴方には限らない、何人にでも遣はしますッて、ついで外方を向いたものなんだ。

君の御祖母さんだけれども、僕は大きい癪に障つたね。」と、調子高になつて、「僕は今大學に入つて居ないしさ、私立病院の醫員と云ふんだらう、其邊の醫者の藥局生同様に思はれても詮方が無い様なものだけれども、僕が大きいに努力するとしたら、洋行する事が出来ないとは限らんだらう。けれど、君の御祖母さんは左様思つて居ない。兒玉權二は、到底今日以上に發達し得る男でないと思つてるんだね。いや、さうさ。さうだとも。僕は何も美都ちゃんの美貌に迷つて、御祖母さんに話を爲たんぢやないけれど、御祖母さんは天から僕を排斥する意だつたんだせ。僕だって、其様に排斥されながら、侮辱されながら、其でも君の家に同居してゐるほどの意氣地なしぢやない意だ。だから、僕は不意に君の家を去つて、此處に下宿したんだよ。」

元二は始めて權二が我家から此家へ轉宿した事情を知つたので、聞くが如き惡感情を我家に銜んで居る人に、自分の身の上を頼んだ所で、快く引受けて呉れやう筈が無い。また自分が頼んだのも不覺であつた。前には兩親と自分を罵り、今また祖母に對する惡感情を口外したのは、自分に些の同情さへ有たぬ事を、それとなく仄めかしたのだ。自分は兩

親を罵られたり、祖母に對する不平を聞かう爲に來たのではない。此上は辭し去るより外はないと思ふので、身繕爲出した様子を、權二は早くも見て取り、

「元二君、歸るのかね。」

「どうです、お暇致さうと思ひます。」

「まあ待ちたまへ。君の前途に就いては、僕も大いに考へてるんだから、尙ほ君の希望も聞き、僕の希望も述べやうぢやないかね。」

「ですが、僕はまた出直してまいります。」

「怒つたね。」

「いえ、何有。」

「いや怒つたんだ。怒つたら怒つたで可いが、君が怒つたからと云つて、其が何になるんだ。」

權二が屹度元二を見据えて、尙ほ何か言進まうとした時、階段を上つて來る足音が聞えたので、其方へ耳を澄した。

梯段の足音は、既に二階に上り了つて、應て權二が室の前を隣室へ過去らうとした。

「久能木君ですか。」と、權二が聲を掛ける。

「さうです。」と、足音が立止る。

「貴方の小説が東洋新報に掲げたですね。大いに祝します。」

「難有う。」とばかりで、足音はまた過去らうとした。

「御入りになりませんか。今丁度茶を入れたところですが……元二君、障子を明けて呉れたまへ。」

元二が障子を開けると、振り返つた勝彌と顔を見合せた。

「久能木君、如何です、粗茶ですけれども。」

「難有う。」

勝彌は豫て權二を好ましい人物と思つて居ないので、平生ならば其儘自分の室へ行つて了ふのだが、元二が容姿の美しいのが、何だか神秘的の何物かある様に思はれたので、つい權二の部屋に入る氣になつた。

權二は何卒此方へと、勝彌を火鉢の向に迎へて

「まだ拜見を爲ないですが、貴方は嘸ぞ御満足でせうと思つて、僕も愉快に絶へないんですよ。」と、喜ばしうな笑聲を漏した。

「難有う。ですが、満足する様な作物ではないんです。自分で讀返すのが可厭になる様な作物なら、寧ろ書かなかつた方が可い位ですからな。は、は。」

勝彌は口は權二と語りながら、眼は元二から離れないのだ。

權二は勝彌の様子に、不圖思付いた事があるので、元二を見返りながら、

「久能木君、此人は僕が親く爲てる柏木元二と云ふのですが、何卒以來御懇意に願ひたいのです……元二君、君からも願ふが可いよ。」

元二は勝彌を何様の人とも知らないで、何だか挨拶が爲難い様で、唯丁寧に會釋を爲た。

「いや、僕の方から御交際を願ひたいのです。僕の室は直ぐ隣ですから、遊に來て呉れたまへ。」と、勝彌は何だか元二が好きでならない様な氣が爲るのだ。

「はい、難有う。」と、元二は垂頭して居る。

「見玉君 柏木君と云ふと、あの何ですな、僕は階下のお須壽から聞いて知つて居ますが、君と極親密に爲てお居でたか云ふ美都子さん……たしか美都子さんと云つたと思ふですが……君に臂突を編んで贈つたり、羽織を縫つて呉れたりしてお居でたか云ふ、美都子さんの兄さんなんですか。」

元二は覺えず顔を上げて權二を見ながら、妹が其様事を爲たとは、聞いた事も見た事もない、臂突は現に權二が自分と共に小川町の勸工場で買ったのであつて、妹が編んで贈つたなどとは氣もない事であるのに、權二が其様事を云觸らして居るのかと思ふと、可厭な氣がしてならなかつた。

權二は覺えず顔を赧めてとぎまぎしながら、

「元二君に美都子と云ふ妹のある事は事實ですが、僕に臂突を編んで呉れたとか、羽織を縫つて呉れたとか云ふのは、事實無根です。お須壽なんて女は、實に饒舌で、好加減な想像を事實らしく吹聴したがるんですア。臂突なんざ、元二君と一緒に勸工場で買つて來たんで

さア。いや、饒舌にあつちやアかなはんですな、ははは、ハハハ。」

元二は權二の語に、さては然様かと可厭と思つた意が稍薄らいた。

「さうでしたか。では、僕がお須壽に搦がれたんですな。ははは、ハハハ。」と、勝鬨も笑つて了ふ。

權二が臂突や着て居る羽織が美都子の手に成つた様に、お須壽に吹聴したのは事實なのであるのみならず、美都子と自分との間には、未來の約束でもあるかの様に吹聴して居たのだ。で、今しも美都子に就いて顔を赧める様な話が出たので、彼の祖母千代乃に自分の希望を排斥された不平が、心の中に勃々と發つて來て、其不平を消す爲に、何か云て見たくてならなくなつて來た。

「久能木君、」と、權二は嘲ける様な語調で、

「柏木君の妹さんは、我輩なんぞに如何して目も呉れやせんですよ。何を云つたッて洋行した男でなきやア夫に有たないんで、大氣焔なんですからな。ははは。」

元二は嚇として權二の横顔を睨んだ。

「美都子さんは其様希望を有つて居るんですか。」と、勝彌は權二と元二の顔を等分に見て居る。

「無論然様だらうと思ふですな、御祖母さん始め其意見なんですからな。」

「然様でせうなア、其は。何人しも、孫や娘の前途を計になると、善が上にも善かれと思ふのが人情でせうからなア。僕は美都子さんの御祖母さんや、御兩親に同情するです。」

權二は勝彌の返辭が面白くないのだ。此兄の様を見て、其妹がさる借上の希望を有つて居ると聞いたたら、勝彌も定めて冷笑するであらうと豫期して居たのに、案外にも同情するなぞと云ふのだから癢に障つてたまらぬ。

「君は然様云はれるけれども、何等稱すべき技藝も教育もなく、唯美貌ばかりで人を釣らうと云つたところで、」と云掛けたが、元二の前では些と云過ぎだつたと、語を斷る。

「美貌で人を釣らうと云ふのは、そりや怪しからん話で。」と勝彌は眼に不快の色を浮べて、「美都子さんは其様人ですか。」

「いや、さう云ふ譯でもないですが、何等の教育もなく、唯美しいと云ふばかりでは、僕の

所思では、」

「君の所思ですか。」と、勝彌の眼には怒色が見えて、「君の想像で今の様な事を、而も其人の兄さんの前で口外されるとは、君にも似合ないですな。」

元二は權二が何と答へるかを唇を噛みながら其顔を凝視めた。

權二は元二が怒る位は何とも思はないが勝彌の思はんほごが何とやら後目痛く、

「いや、さう思はれちや困るですね。元二君の妹が然様だと云つたのではないのですよ。一般の女の上から見て、美貌ばかりを頼みにして不相應の希望を懐いてる者を、つい語氣を強めて、」

「けれども、柏木君に氣の毒ではないですか。」

「元二君に對しては失言だつたかも知れんです。併し、」と、權二は暫時考へてから、「久能木君、試みに御問ねするんですが、君は教育の無い婦人でも、美貌下さへあれば終生の友として満足されるんですか。」

「さア、教育が無いと云ふのも程度問題でせうね。」と、勝彌は微笑を含みながら、「教育が

あつたとしても、其婦人の性質如何に依つては、寧ろ無い方が可いかも知れんですね。兎に角美しいと云ふ事は、婦人に取つては第一あつて欲しい資格ではないでせうか。僕は斯う思ふですね、教育があるよりも寧ろ婦人らしく、柔順で正直であつて欲しい。或程度までは必要と思ふ或程度までは、自分の妻にしてからでも、教育し得らるゝものと信じてるです。』

『では君は、美都子を妻に貰つて呉れと云はれたら、貰つて呉れるでせうな。』

『いや、それは君が今、僕に答を求められる問題でもなければ、また僕が答へ得べき問題でも無いんです。僕が今云つたのは君と同一で、一般の婦人に就いての見解なんで、美都子さんには何等の關係もない筈なんですよ。』

勝彌は覺えず唾を三ツまで續けさまに爲て、自分が未だ寢衣の儘なのに氣付いて、

『兒玉君、僕は失敬するですよ。柏木君、よろしければ遊に来て下さい。失敬しました。』
ついで立つて、其身の室へと歸つて行つた

(五)

勝彌は自分の室に歸つて見ると、何時の間にか夜具も藏つてあり、掃除まで出来て居て着物さへ綺麗に疊んであつた。

『須壽さんが爲て呉れたんだな。彼の母親さんとは違つて、可愛い女だ。』

其實お花がお須壽の命を受けて爲ただけれども、勝彌は斯う思ひながら、襦袢を脱ぎ、寢巻を脱ぎ、着物に着替へて見ると羽織が無い。押入に藏つて呉れたかも知れぬと、押入を開けて見ても其處にも無い。

『此は不思議だ。彼様腐つた様な羽織を盗つて行く奴はなし、何も不思議だ。』

勝彌は斯う嘆き、或ひは綻か破れた處があつたので、お須壽が縫つて呉れる意で階下へ持つて行つたのかも知れぬとも思ひながら、尙ほ其邊を探して居ると、梯段も廊下も走つて来て、がらりと障子を明けたのは女中のお花である。

「久能木さん、御羽織を。」

お花が其處に置いた羽織を見ると、勝彌は見覺が無い。

「其は誰の羽織なんだ。」

「貴方の。」

「なに乃公のだ。馬鹿を云つちや不可ん。乃公が其様羽織を有つてない事は、お前だつて知つてるぢやアないか。それに、何だか新しい羽織ぢやないか。」

「だつてお須壽さんが、久能木さんの御羽織が出来たから、上げてお出でつてお云ひなさいましたもの。」

「須壽さんがから。」

「えい。」

「何かの間違だ。お前ぢや没分曉んから、須壽さんに來て貰つて呉れ。そしてな、乃公の羽織が階下にあるなら、其を持って來てお呉れつて云ふんだ。羽織が無くつちや寒くつて不可ない。」と大きな嘔を爲た。

お花が階下へ行くと、間も無く階段を上つて來る足音がするけれども、お須壽の平生の足音とは違ふ。病人の婆さんが上つて來る筈はないが、はて何人が來たのだらうと、廊下の足音を聞いて居る中に其が止まると、お花が開放に爲て置いた障子の蔭から、私ッと差覗いたのはお須壽だ。そして、さまりの悪るさうな様子を爲ながら、赧くした顔には微笑が見えて居る。

勝彌は廿歳にもなつて子供らしい様子を爲る女だと思ひながら、

「須壽さん、風が來て寒くつて不可いから、此方へ入つて其處を閉めてお呉れ。」

「叱つちやいやよ。」とにつこりする。

「叱りなんか爲ないが……寒くつて先刻から幾度嘔を爲たか知れない。」と、また大きな嘔を爲る。

お須壽が障子を閉めて入ると、

「此羽織は如何したのかね。」

「貴方に着て戴くのよ。」と、微笑みながら一入顔を赧くする。

「僕に着ろつて。」

「え。」

「僕でもないものを。」

「い、え、貴方のお羽織よ。私、貴方に調へたんですもの。」と、また莞爾する。

「君が調へたんだつて。」と、目を睨つて、

「それが没分曉んぢやないか。」

「い、え、分つて居るは。」

「僕には分らないね。まア坐りたまへ。」

お須壽は羽織を取上げて、勝彌と差向に火鉢の傍に坐つて、

「貴方お寒いでせうのに、何んだつて着て下さらなくつて。」

「僕の羽織なら着るけれども。」

「お着なさつたら話してよ。着て下さらなきやア私……。」と、本意なげに垂向いた。

「ぢやア着よう。話すんだせ、着て了つたら。」

「え。」と、勝彌の背後に廻つて被けて遣る。

「こりや立派な羽織だ。僕には立派過るかも知れんね。」

「そんな事はないは。能く似合つてよ。鳥渡立つて見て頂戴な。丈が短かアないか知ら。」

お須壽は勝彌を立てて、衣紋を直して遣りなぞして、少し離れて見上げたり見下たり、

「丁度能かつたは。袴も可いでせう。」

「可か悪いか見て呉れたまへ。」

「丁度能う御座んすは。」

「まだ坐つちや不可かね。」

「い、え、能くつてよ。」

二人はまた差向に坐つた。

「須壽さん、僕は君の云ふ通り羽織を着たんだせ。」

「だから私も話してよ。」と、お須壽は髮髻と勝彌を見て、「貴方御怒りならなうと。」

「僕が怒る譯が無いぢやアないか。」

「だつてえ。」と、尙ほ疑乎と見て居る。

「話さなきやア怒るさ。僕は須壽さんの云ふ通羽織を着たのに、」

「だから、私御話してよ。」と、また疑乎と勝彌を見て、「矢張怒られるうたは……だけれども話してよ。其お羽織ね、私貴方の御金で調へたんですは。」

「えッ、僕の金で。」と、勝彌は覺えず眉を顰せて、「僕が令母さんに預けてる金でかね。僕は従來の羽織で澤山なんだ。」

「ですけれども、餘り汚れて、見てもないから、私阿母さんと相談して、あの御金ね、はら貴方が私に惠與すつた彼の御金ね。彼金で調へたんですから……怒つて下さつちやいやよ。」と、垂頭く。

「どうか。」とばかりで、勝彌は唯呆れて居る。

「お怒んなさつちやいやよ。」と、お須壽は勝彌が何にも云はないので、氣味わるさうに私つと顔を見た。

「怒るどころか、僕は須壽さんに禮を云ふよ。だけれども、僕は羽織なんか欲しくなかつ

たんだよ。併し其も可い。僕は須壽さんに禮を爲たかつたから爲たんだのに、其金で僕の羽織を調へて了つちや、僕の意が通らなくツて残念だね。ちやア、斯う爲やう。此羽織は、須壽さんが調へて呉れたんだから、喜んで頂戴するとして、僕は改めて須壽さんの此好意に對して、禮を爲る事に爲やう。」

「い、え、私御禮なんか入りませんは。其より私あの……。」と云淀む。

「僕の禮を受けないで云ふのかい。」

「私其禮事爲て戴くよりかね、貴方がね……。」

「うむ。僕が。」

「貴方が偉くなつて下さるのが嬉しくツてよ。」と、垂頭いた横顔が眞紅になつて居る。

「君は可愛い事を云つて呉れるね。」と、勝彌は方の籠つた聲で、「偉くなつて見せるよ。」

「屹度偉くなつて頂戴よ。」

「偉くなつたら、澤山禮を爲るよ。」

「私そんな禮なんか……私何にも欲かアないは。」と、聲に潤をもつて、耳の附根まで眞

紅になつた。

勝彌も可愛らしい心を持つた女だと、疑乎とお須壽を見た時、隣室の檻二が部屋の障子の開く音が爲た。お須壽がはつと思つて見返へると、柏木元二が室の入口の廊下から、

「久能木先生、先刻は失禮しました。何れ其内御邪魔に伺ひます。」と、小腰を屈めて會釈を爲て、ついで去らうとする。

「柏木君、待らたまへ。」と、透かさず呼止める。

「何か御用ですか。」

「いえ、用と云ふんぢやないですが、暫時話して行ッちや如何です。」

元二は如何したものかともちくして居る。

「まあ可いでせう。お入りなさい、少し伺つて置きたい事もあるですから。」

「さうですか。では暫時御邪魔を致します。」と、室の中へ入つて来る。

「須壽さん、何か菓子を。」

「はい。」

お須壽は勝彌から何か聞きたい事があつたのだから、元二の入つて來たのが憎らしかつたけれども、詮方がなしに階下へ行つた。

元二が勝彌から盤一枚はご入口の方に坐らうとしたのを、強て火鉢の向に坐らせ、

「兒玉君とは餘程御無意の様ですが、御親戚の關係でもあるんですか。」

「いえ、其様事はありません。不圖した事から、兒玉君が私宅に同居された事があるだけなのでして、近しい關係なんぞ些も無いんです。」

「併し、大分親密に交際してお居での様ですな。君ばかりでなく、御家族の方とも大分親しく爲てお居での様ですな。」

「さうです。それも、僕が不圖兒玉君と友人になつたからでした。」

元二の語る處に據ると、元二は小學校を卒業した頃から腦病になつて、一時學問を廢して居たが、此儘爲す事もなく成長したところで、家計豊ならぬ家の子と産れた前途が危まれるので、何かの業を修めると思案した結果、神田の某私立醫學校へ通學する事にした。それは今から三年前の十七歳の時で、兒玉權二と親くなつたのも此際の事、自分は矢張腦

患の爲に一年ばかりで退學したが、権二との交際は尙ほ續いて、彼が乞ふまゝ我家に同居させる事になつた。それも長い間ではなく、去年の夏から秋までの三月ばかりで、何か意に満たぬ事があつたと見えて、突然此家に轉宿した後も、三日にあげず遊に來て呉れるから、自分も斯うして時々遊に來るのであると云ふ。

元二は権二との關係を語り了つた後で、自分が外見に依らず體質の弱き事、平素に腦病を患ふる事から、自分の家は元來徳川家の旗本で、六七年前までは相應に資産があつたけれど、父が商業に手を出して失敗して、今では家計に迫るゝまでになつた事、家には六十近き祖母の千代乃を始め、父の重勝、母の阿多喜、十七になる妹の美都子と昨年春生の鐵三と云ふ弟、それに自分の六人である。いや今一人祖父の妾腹に長夫と云ふのがあつて母には異腹の弟、自分等には叔父に當る、某銀行の軽い社員である男を加へて、一家族七人である事をも話した。

「七人お居でたと云ふんぢや、一家族としては随分多勢の方ですな。」

「ですから、僕も大いに働かなきゃアならんですけれども」と、元二は悄然と垂頭して、

「今御話爲た様に腦が悪いんで、今日まで此と専門に學んだ事は無いのですし、世情には通じないし、何を爲て働かうツて事が無いので當惑して居るんです。」

勝彌は頻りに首肯しながら「僕も君に似て居るんです。僕も病氣の爲に中途で學業を廢したのだから、大に同情するんですが、併し、働かんけりや食へんのだから、大いに奮發したまへ。況んや僕は僕一人飢ゑなければ可いんだが、君は七人が飢ゑてはならないんだ。」

「ですから、兒玉君に相談して見たんですが」と、元二は斯う云ひ掛けると眼が潤んで來て、聲に稍頭を有ちながら、「唯罵倒されて終つたのです。」

「唯罵倒されたツて。」と、勝彌は眉を寄せて、「如何してですか。」

元二は權二が罵つた儘を——自分が美しく生れたから悪いと云はれた事だけは除いて——隠すところなく話して、

「……両親が僕を可愛がり過ぎたのも實際ですし、僕が腦が悪い爲に根氣の續かない事も實際ですから、罵倒されても詮方がありません。」と、臉に溜つた涙が大きな雫となつて、ぼたりと膝に零らした。

「併し、其も止むを得んとして、君怒らないが可いですよ。君が今後の活動如何に依つては、其等は過去の事實として葬ひる事が出来るんですよ。及ばすながら、僕も大いに盡力するから、何か君の仕事を見付けるから、餘り心配したまふな。」

「有難う。何卒願ひます。」と、元二は餘りの嬉しさに、覺えず疊に手を支いた。

「君手を上げたまへ。其様に爲て居られると、話を爲るのに窮慮で不可い。さア上げて呉たまへ。」

勝彌は元二に手を上げさせて、つく／＼と其顔を見ながら、此様に美しく生れて居て、それで碌に學問も爲得ないで——腦が悪いと云ふ事だけれども——自分如きが僅かに同情の語を掛けたいけで、疊に手を突いて禮を述べるとは、何と云ふ悲惨な事か。自分は此二三日こそ階下の婆さんに可厭な顔もされず、お須壽が羽織を調へて呉れるまでに厚遇して呉れるけれども、一週間前までの有様は如何だ。乃公と此人と一概に論ずる譯には行かぬけれども、地を替ゆれば乃公も同一だと云つても可い。殊に、美しく生得いたのを攻撃されるに到ては、其人の身になつたら何様に辛からう。此人に如何して職業を興んかとの考

へは、自分も今は皆無だけれども、何か探し出して、多少の慰安を興へて遣りたい。差向さ何かありさうなものだと思ふのであるが、さて思當る事もなかつた。

「柏木君、人は努力さへすりやア、大概な事は解決されて行くものだから、君も大いに努力したまへ。なアに、何とかなる。心配したまふな。」

「ですけれども、僕は腦が悪いもんですから、つい其の、何も思ふ様に勉強が出来なくて困るです。」と、ともすれば垂頭くのである。

「それは左様かも知れない。併し、君何だらう、病氣に障らない程度でなら、出来ない事は無いだらう。」

「さうです。それは出来る意です。」と、語に力が無い。

「で、君の脳病は、醫者が何と何ふんですか。」と、疑乎を見る。

元二は稍鼻白んで、

「醫者ですか。醫者は重く云はないのです。毎朝體を水拭を爲て、適宜の運動さへ取れば、別に樂は不用いと云ふんです。」

「其位な臆病なら、何でもないですな。」と、憐れむが如き笑顔を見せて、「水拭を遣つてゐるんですか。」

「いえ、まだつい遣らないんです。」と、また垂頭く。

「遣つたら可いでせう。尤も、まだ随分寒いからなア。」

「へえ。」と、元二は笑を含みながら眞紅になつた。

勝彌はさう思つた、此人は臆が悪いと云ふよりか寧ろ勉めないんだ。親が可愛がり過ぎたからでもあらうが、自分に勉める意がなければ、何を爲たどて成りさうな事が無い。兒玉は此人の美しく生たのを批難したさうだが、其も半面の眞理ではあらうが、勉めないから悪いんだ。勉めない人を援けたとて、到底成功する筈が無いから、職業を探して遣つたところで駄目だ。寧ろ断つて了つた方が可い。と既に口に出して云はうとした。

けれども、元二は悄然として垂頭いて、白く綺麗な顔を薄紅く染めて居る美しさを見ると、勝彌は何だか可愛相でならぬ。兒玉に辱しめられても得怒らず、自分が同情の語を掛ければ手を突いて禮を云ふほど弱い意の男ではないか。世にも稀らしいほど美しく生付い

て居るだけに、何だか可愛さうで、出来るものなら何とか爲て遣りたいと思ふのである。

「柏木君、僕は今から出掛けて、君の爲に何か職業を探して来るから、明日また遊ながら来てくれたまへ。」

「あゝ左様ですか。それでは、また明日伺ひます。」

元二が辭去らうとした所へ、お須壽が菓子を持つて来たので、勝彌は其菓子を悉皆紙に包んで、御祖母さんや妹さんへ土産にしたまへと元二に與へて、元二が辭し去ると、自分は晝飯兼帯の朝飯を濟して下宿を出た。

(六)

富士見町五丁目の、蛙ッ原から靖國神社の方へ上がる坂の下を、左へ入つた小路の左側に太田武弘と標札を打つた格子戸を、今しも内へ入つたのは久能木勝彌である。格子戸の開く音を聞いて玄關に出て来たのは、此處の下婢のお玉で、十七八にもならうかと思ゆる年

頃の、何處か愛くるしい女だ。

勝彌はお玉を見るより、

「旦那はお宅在かね。」

「居らっしゃいません。」

「留守か、困つたな。」

勝彌が當惑の眉を顰めると、お玉は次室の茶の間の方を見返りながら、

「奥さまは居らっしゃいます。」

「奥さんではお分りにならないかも知れない。」

「玉や、何方なの。」と、若々と清しい聲が茶の間から問うた。

「奥さん、僕です、久能木です。」

「あら、久能木さんで居らっしゃるの。玉や、何故早くお知らせでないの。」

云々出て来たのは、でこ／＼の廂髪の、色の白い眼の清しい、格向よくすらりと伸びた

體格の、歳は廿歳前後らしい女で、太田紫瘦の妻の都根子である。

「知らなかつたもんですから、失禮致しました。まあお上り遊ばせな。」

「紫瘦君は御留守ださうですな。」

「はい、生憎鳥渡出掛けて居りますの。まあお上り遊ばせな、其内には歸宅りませう

から。」

「難有う。何處か遠方ですか。」

「いゝえ……何處へ参るとも申さないで、小川を伴れて出ましたの。」

「小川。」と、勝彌はよく／＼小川を嫌つて居ると見え、面に不快の色を浮めながら、「小

川が御厄介になつてゐさうですね。」

「小川を御存知で居らっしゃいますの。」

都根子はお玉に顔を見合せた。

「二二度逢つた事があるだけです。其も逢つたと云ふよりか、寧ろ見掛けたと云ふ方な

んです。四五日前に紫瘦君の使に、僕の下宿へ来たさうですが、僕は逢ひませんでした。」

「お逢ひなさらない方が能う御在いますは。」と、都根子も小川を好まぬらしい口氣で、

「いろいろ御話がありますですから、お急でなきやア、御上り遊ばせな。その中には太田も歸るでせうし……兎も角もお上り遊ばせな。」

勝彌は都根子が強るに委せて、八疊の客室兼帯の書齋へ通つた。

一間張の机を床の傍に縁側へ向けて置き、上には文房具を始め、封書だの端書だの、原稿紙だのが亂雑に載せられてあつて、床には洋書と書雜誌などが、此も亦態どらしい迄亂雑に置いてある。紫瘦が髪の方、衣服の好に書齋の様を比べると、其矛盾が餘りに甚だしい様だとは、勝彌が毎に思つて居る所である。

都根子はお玉と二人で、座布團だの火鉢だのを進め、茶を入れる様にとお玉に命じて置いて、勝彌と相對して坐つた。

勝彌は此間に紫瘦の机の上に、早くも自分が今來訪した用件其物を認めためたので、都根子が坐るのを待ちかねて、

「奥さん、僕が今日伺つたのは、日外紫瘦君に願つて置いた僕の原稿を、返して戴きたいのです。」

「然様ですか。留守で分りますか知ら。」と都根子は夫の机を見返る。

「原稿は彼處に見えてるんですが、紫瘦君の御留守に、貴女から返して戴くのは順序が違ふですから……實は人に仕事を與へたいと思ひますので、ならう事なら今戴いて歸りたいと思ひますが、如何でせう。」

「然様で御在ますねえ。」と、都根子は考へながら、「彼御原稿では、宅でも久能木さんにお氣の毒だと申しましてね。」

「いや其様事は無いです。如何でせう、頂戴してまゐつては。」

「左様で御在ますねえ。」と、都根子は鑿乎と考へて居て、頓には返事をなし得ない。勝彌は都根子が返事を爲し得ないのを見て、

「急ぐ事は急ぐんですが、一日を争ふと云ふほどの事も無いですから、明日にも亦頂戴に上る事に致しませう。紫瘦君が御歸宅でしたら、宜敷御傳言を願ひます。」

「はい、歸宅しましたら話しまして、小川に直ぐお届け致します。太田の氣象は御承知の通ですから、何卒悪く思召して下さらない様に願ひますよ。本統に御氣の毒で御在ますは。」

其處にお玉が茶を入れて持つて来たので、都根子は其を進めながら、

「もう歸宅の時分で御在ますから、何卒御寛坐遊ばして下さいまし。」

勝彌は茶を一口飲んで、「少し他へ廻る用があるんですから、今夜か明朝出直して参る事に致しませう。」

「左様で御在ますか。それでは、小川に直ぐ届けさせます事に。」

「小川は困るですから、僕が伺ひます。」

都根子は凝平と勝彌を見て、

「餘程小川をお嫌ひだと思えますのね。」

「さうです。僕は嫌ひです。彼様破倫を敢て爲ようとされる様な男は大嫌ひです。僕は彼男の名を聞くだけでも、非常に不快なんです。奥さん」と、都根子は屹度見て、「紫瘦君が何だッて彼様男を養つて置かれるのか、僕は太りに不平なんです。」

都根子は覺えず膝を進めて、

「私ね、太田の所思が解らないと思ひます。貴方にお話がありますと申しましたのも、

實は小川の事なんです。私ね、何だッて彼様男を宅に置かなきゃならないかと思ひますから、随分反對して見たんですけれども、食へないから可愛相だと申しましてね、さうく置く事に致しましたの。私實に可厭で御在ますは。」

「兎に角紫瘦君の爲に惜しむです。」

「ですからね、私貴方に願つて、太田に御意見を願ひたいと思つてますの。」

勝彌は頭を振つて、

「それは駄目です。」

「何故で御在ます。」

「僕は既に忠告したんですが、先生用のないんです。」

「もう仰有つて下さいましたッて。」

「さうです。」

「貴方が仰有つて下さつても駄目だと、他に忠告して戴く方はありませんし、本當に困つて了ひますな。」と、太息を吐く。

「奥さんが反対なすつて効がなさやア、何人が忠告したって駄目ぢやありませんか。併し紫瘦君が早晚反省される時が来るだらうと思ひます。」

「それも何時の事だか知れませんが。今見たいに小川を愛してた日には、容易に反省する事なんかありませんは。」と、都根子はぐったりと小首を傾げながら「小川が宅にまゐつてから、私のお友達の方は、何方も来て下さらなくなッ丁ひますしね、私の方からお訪ね致しますと、御無沙汰して済みませんってお云ひなされた後で、直きに小川の話が出るんですもの、私實に困ッ丁ひますのよ。」

「御察しますです。僕も亦其内に、機会があつたら忠告するですから、奥さんも大いにお迫りなさるが可いです。では、僕は又明日伺ひます。」

「さうですか。まことに失禮を致しました。」

「紫瘦君へ宜く願ひます。」

「申聞ひます。」

勝彌が辭し去ると一歩遠に、紫瘦が小川水鏡と一緒に歸つて來た。

「所天、久能木さんにお逢ひなさらなくッて。」

「逢はない。留守に來たのか。」

「今お辭去でした。」

「何の用で來たらう。」

紫瘦が獨語の様に呟きながら書齋に入つたので、都根子も後から尾いて行つた。書齋には勝彌に進めた火鉢や茶碗が尙だ其儘に爲てあつた。

「久能木は上つて話して居たんだね。」

紫瘦は火鉢や座布団をじろく見る。

「其邊へ散歩に行らしたと思ひましたから、待つてらッしやいて申しましたの。」

「で、何か用でもある様な事を云ッたかい。」

「さうですの。」

都根子は勝彌が來訪したのは、日外預つた原稿を返して貰ひに來たので、それも實は至急を要する事情がある、其事情と云ふのは或人に職業を興へたいからと云ふ事を、聞取つ

たまゝに話して、

「……明日また伺ひますてッ御辭去りでした。」

「人の爲に仕事を拵へるんだつて。」と、紫瘦は鼻頭で笑つて、「辛と新聞紙に小説が掲る様になつたばかりで、もう直きに人に仕事を與へると御出でなすつたな。ふゝふ。人と云ふものは、直に増長するから可厭になる。」

「増長なすつた譯ぢやないでせう。久能木さんは同情心の強い方だから、何人かに又泣付かれて、一生懸命に奔走してお居でなのでせうよ。」

「お前は平生、久能木が好きだから然様云ふけれども。」

「あら、私何時、久能木さんを好きだと申した事があつて。」と都根子は不快らしい眼をして屹度夫を見る。

紫瘦は外方を向いて、

「久能木の事だと云ふと、何様事でも善意に解して褒めるだらう。褒めるからには、好だと解釋するのが當然だらう。」

「へえ、さうですか。ぢあア私、以來決して人の美しい所を見ない事に爲るは。小川さんなんぞと比べたら、まるで人が違つてゐるけれども、其を同一に見て居れば可いんですね。」

「何人が其様事を云つた。」

「さうはお云ひなさらなくつても、結局さう云つた事になりますは。」

「さうか。お前は何か、私が久能木を貶したので、怒つたと云ふのか。」

「だれが其様事を云つて。」と、一層本氣になる。

「けれども、結局さう解釋するより外詮方がないぢやないか。」

「さうして、如何です。」

「如何と云つて、お前が久能木を褒めるから、好きだから褒らんだつて私が云つたんだ。其をお前が怒つて、人の美所を見なきやア可いの、小川を久能木と同一に見れば如何のツて。」

「それは云つてよ。」

「それが、お前が怒つたから其様事を云ふんだ。」

「もう止ませうよ。他人の事で、所天と争つても満りませんからね。私、もう止した

んですよ。」

都根子が茶の間へ行かうとしたのを、紫瘦は呼止めて、

「おい、お待ち。」

「御用ですか。」

「用はいくらもある。」

「さうですか。伺ひませう。」

都根子は可怖い顔を爲て居る夫の前に坐つた。途端に臺所の方で、お玉が高く叫んだ聲がすると、續いて小川の高笑の聲が聞こえた。

「下婢にまで調戲ふ様な人の、何處が所天の御氣に召したんでせう。他人から悪く云はれても構はないで、彼様破倫な人を世話しなきゃならないんですか知ら。」

「また其を云始めたね。」と、紫瘦は俄然に語調を和らげて、「小川だつて、お前の思ふ様に悪い男ぢやないよ。彼男にだつて、美所はあるさ。お前の云草ぢやアないが、何も其様に、他の美所を見ない事にしなかつて可いだらう。」

「だつて、私には、彼人の美所ッて、此ッばかりも見えないから詮方がありませんは。」と、語を斷つたが、暫時してから、「御用があるッて仰有つた様ですが、其を承はらうぢやありませんか。」

紫瘦は直ぐには答へないで、頻りに考へて居た。

紫瘦は都根子が小川水鏡を厭ふのを、無理も無いと思はぬではない。けれども、水鏡は感情ばかりで動く男で、彼が其師たりし人の妻に戀を爲掛けたのも其で、決して其を善い事とは思つて居ない。現に其事に就いては、不良い事を爲掛けたので、如何にも面目次第もありませんと、何の關係もない自分にまで謝して居るのだから、善惡無差別と云ふのではない、唯意思が弱いだけなんだ。それは無論彼の缺點だけれども、寧ろ憐しむべき男なんだ。思想も面白ければ筆も立つし、早晚に何か陀度大作を出す男だと思ふから、それで自分は愛しもし、宅に置いて養ふても居るのだ。都根子は唯彼が過去を罪し、既に彼が悪るかつたと自覺してゐる過去の罪を憎んで、其他を見ないもんだから、唯彼を厭ふのだけれども、如彼でもまた困る。けれども、事柄が都根子を強ひて如何されるものでないのだから、止むを

得んけれども、今争つたところで仕方がないから、今日はもう此上何も云はぬ事にしよう。併し、何とか都根子の感情を融和する手段を執らないと、何時も水鏡の事で争つて、家庭の平和までも破る事にならう。と思ふと唯太息を吐くのみだ。

「御用がなきやア、お茶を持って参りますから。」

都根子が茶の間へ行くのを、今度は紫瘦も止めないで其爲すまゝに委せ、客火鉢に残つた火を自分の火鉢へ移して居た。

都根子が茶を入れて持つて来ると、其後から小川水鏡が入つて来た。

水鏡は身材の高い、面長な色の白い、體をしなくと女らしい様子をする男で、年はまだ廿歳か一位でもあらう。

都根子は水鏡が来たので、早くも面には不快の色を浮めて、直ぐに立去らうとした。

「都根さん、久能木は原稿を早く返して欲しいと云ふんだね。」

「どうですの。」

「では、小川君に持つて行つて貰はう。小川君、君此原稿を久能木に返して来て呉れたま

へ。」

「まじ。」

紫瘦が机の上から勝彌の原稿を取上げて、小川へ渡さうとする迄、都根子は黙つて見て居たが、

「小川さんには、御頼みなさらない方が可いでせうよ。」

「何故かい。」

紫瘦は勝彌が水鏡を厭つて居るのを知つて居るけれども、水鏡の思惑をかねて、行掛り上斯う問ねて見た。

水鏡は怪訝な顔を爲ながら眼を睥つた。

「お急ぎなら、小川さんに届けるせませうツて私が云つたんですけれども、それは御免を被りますツて、お云でしたから、小川さんにはお頼みなさらないが可いでせうよ。」

「どうか。」と紫瘦は首肯した。

水鏡は莞爾笑つて、

「蒼川さんは正直な方ですから、手数を掛けては氣の毒だと思ひなさんでせう。屹度さうです。私は蒼川さんにお眼に掛りたいんですから、原稿を御届しに参りまして序に、お眼に掛つて来る事に致します。鳥渡行つて参りませう。」

水鏡が立上らうとしたので、紫瘦はあはて、止めて、

「いや、君は行かん方が可い。」

「如何してでせう。」

「如何してと云つて、兎に角君は行かん方が可い。」

水鏡は不安の色を浮べながら、

「奥さん、如何してでせう。御存知なら、教へて戴きたいですね。」

都根子は苦笑を爲ながら、

「私にも分らないは。」

紫瘦は勝彌の原稿を状袋に入れて上書を爲て、

「君、これを郵函に入れて来て呉れたまへ。」

「は。」

水鏡はつまらなさうに其を受取つて、悄然として出て行つた。

(七)

夕暮近い頃で、今日も亦寒氣は、水道の龍の口から氷柱が垂つて、それが午後になつても解けないと云つて、お花が愚痴をこぼした程で、而も朔風が強いことから、お須壽の母なぞは炬燵に埋れて了つて居る。

勝彌が机に片臂を倚せて、新聞紙を讀んで居る傍に、元二も机を控へて、セッセと謄寫物を爲て居る。

謄寫物と云ふのは、紫瘦から郵便で返して來た自分の原稿に勝彌が朱を加へたので、元二に其を淨書させて居るのである。自分に暇が無いではなし、人を頼んで淨書する必要は無いのだけれども、元二に仕事を與へる爲に、態と自分は手を明けて遊んで居て、斯して元

二に若干の報酬を拂つて、其心を安めて遣らうと爲て居るので、元二は今日で二日通つて、昨夕は多少の報酬を貰つて、非常な喜びであつた。

元二は手が冷るのか、時々筆を置いて両手を擦り合せては、また淨書を續けるのである。で、鼻をする／＼云はせながら、一生懸命に勉強して居る。

勝彌は新聞紙から眼を元二に轉じて、

「柏木君、今日中に書了はなくなつても可いんだから、今日はもう止して、手でも焙つては如何かね。」

「さうですか。」と、元二はもう疲れきつて居たので、御世辭ッ氣もなく筆を置いて了つた。「其儘重ねて置けば可いので、机を彼隅に片付けて、此處へ来て早く煖りたまへ。それに、今日は風が寒いから、暮れない中に歸る方が可い。」

「はい、難有う。」

元二は云はれた通り机を室隅に片付けて置いて、勝彌の前の火鉢に手を暖しながら、「先生、先刻もお願ひしたんですが、僕の宅に入らしつて下さいな。」

「今日かね。」

「さうです。今日は妹の誕生日なんです。御馳走は無論無いんですが、祝の眞似事を爲るから、先生に入らしつて戴く様にツて、祖母さんがくれ／＼も申して居たんですし、僕からもお願ひするんですから、何卒僕と一緒に入らしつて下さい。」

「さうだね。」

勝彌が承引しさうもない様子だから、元二は氣が氣でなく、

「先生、如何でせう。僕の宅では、一家擧つて、先生の御入來を待つてゐるんですよ、僕は屹度先生をお供して來るツて約束したんですから、何卒來て下さい。お頼みです。」

勝彌は首肯しながら、

「君の妹さんの誕生日だと云ふのだから、僕は強て辭するんぢやないかね。」

「では、來て下さるんですか。」と、元二の面には嬉しさが溢れるやうだ。

「君が折角さう云つて呉れるし、君の宅の人達の厚意も謝さんさやならんし、君と一緒に行く事に爲やう。」

「えッ、来て下さるんですか。難有う。宅の者が何様に喜ぶでせう。と、元二はにこしくしながら」では、先生直ぐにお供しませう。」

「君、其先生と云ふ事だけは止して呉れたまへ。僕には人の師と仰がれるだけの學識も徳望もないのだしね、創作の方だつて、僅かに新聞紙に掲げた位なだから、先生なんて呼ばれる資格が無いんだ。」

「ですけれど。」

「いや、斷じて先生と呼ばない事に爲て呉れたまへ。でないと、僕は君の宅へ行かないよ。」

「云ひません、く、以來先生と呼ばない様にします。」

「それならば一緒に行かう。」

「直ぐにお供爲ませう。」

勝彌は元二に誘はれて其家へと下宿を出た。

ひゆうと電線に陰を立てる朔風は、襟に水を注がれ耳に錐を刺される様だ。

風に向へるは面を伏せて裾を吹捲られと争ひ、背に受けたるは首を縮めて駈出す様に

疾歩で居る。勝彌と元二は露路を大通へ出ると此風に當面から煽られて、一寸背を見せながら裾を押へた。

「たまらんねえ、君。」

「濟みませんです。」

「君の所爲ぢやないさ。併し、」

「先生、電車が来ました。」

「また先生かね。」

「あゝさうでしたッけ……それッ、電車が来ました。」

「乗らう。」

勝彌が駈出すと元二も續いで、四丁目の停留所に停つた電車に飛乗つて吻と息を吐いた。

「此様風の晩に濟みませんです。」

「なアに、電車だから譯は無いらぬ。」

「ですが、御祖母さんが何様に喜ぶか知れませんよ。」

「僕だつて、御祖母さんの好意が難有いから行くのさ。」

「何様に喜ぶでせう。」と、元二の風に荒びた顔には嬉しうな笑が浮ぶ。

二人は九段下から新宿行に乘替へて、四谷の鹽町二丁目の停留所で電車から降りた。

風威は少し衰へたけれども、寒氣は尙ほ骨まで凍りさうで、夜店などは一つも出て居ない。

「柏木君、御祖母さんは何が好きかね。」

「さうですわね。」と、考へながら、「此と云ふものは無い様です。まア酒でせうか。それも晩酌に一合位も喫みますか知ら。」

「酒かね。」と、勝彌は案外の體で、「妹さんは。」

「妹は菓子位なもんですわね。」

「西洋菓子も好きだらうね。シニウクリームだのバナ、ケーキだのもお食べだらうね。」

「食べますとも。」

「御祖母さんと妹さんに、土産を持つて行かう。」

「それは困るですよ、そんな事を爲て下さつては。」

元二が止めやうとする中に、勝彌は菓子屋に立寄り、櫻入のスタアとシニウクリーム一袋を買取り、

「君、一寸之を持つて、呉れたまへ。」

勝彌はまた酒店へ入りて、正宗の四合入の櫻二本を買取り、

「此で可い。さア行かう。」

「濟みませんですわね。御祖母さんと妹は大喜びです。其邊は僕が持ちませう。」

「なに、此は僕が持つてくよ。君は前へ歩きたまへ。」

大通から船町へだらくと下りて、一町半ばかりも行つた左側の、三四段の石階の上に門の見える所に来ると、元二は歩を止めて、

「此家です。」

「此門構の家かね。たいした家だね。」と、勝彌は案外の體だ。

「なアに、門はかしが立派なんで、中に入ると家が二軒あるんです。取附の家が然様なん

で。奥には宮内省とかに務めてる人が居るんです。」

元二が前に立つて案内するので、勝彌も續いて門を入ると、成程餘り大きくない家が二軒列んで居る。春か秋ならば草花をも作らるべき、小さい花壇の橋は出来て居るけれども、今は何も無いらしいと、勝彌は夜目にも斯う考へながら、元二の後に尾いて格子戸の前に立つた。風がひゆうツと音立て、吹去たけれども、南向の軒下に立つて居るので、殆んど感じない位だ。けれども、寒氣は戦慄る様だ。

元二は格子戸を上げて、

「何卒入つて下さい。」

勝彌も續いて入つた。

「美都子、く。」

元二が聲を掛けると、稍荒を帯びた男の聲で、

「元二かい。」

「さうです。美都子は居ないんですか。久能木先生をお供爲て来たんですよ。美都子に燈

火を持って来さして下さい。暗くつて詮様が有りやアしない。」

「先生が来て下さつたんださうだよ。父さん、燈火を持つてつてお上げ。」と云つたのは、老女の聲音である。

「今持つて行くよ。」

前の荒を有つた聲の人が斯う云ふと共に、奥の障子に燈火の影がゆらめいたかと思ふと、はッと二人に眩しいほどの洋燈の火光を浴びせた。

「君の御父さんかい。」

勝彌が呟くと、

「さうです」と答へて、小首を傾げながら。

「美都子は如何したんだらう。」

元二の父の重勝は洋燈を手にして、上口へと出て来た。年輩四十四五の、元二の父として斯くあるべく品格のある顔立であるが、唯體格が小さくて、威嚴に乏しいのが物足ないと勝彌は思つた。

元二は不平らしい語調で、

「美都子は如何したんですか。」

「母さんと御湯に行つたよ。」

「ちうッ。」と、尙ほ不平らしい語調で、「父さま、先生が入来ッしやツたですよ。」

重勝は斯う云はれて、これは失禮したと云はぬばかりの顔色を爲たが、直ぐに世辭笑を爲ながら。

「先生で居らつしやいますか。何卒御上り下さい。先刻からお待ち申して居ました。」と、片手を壁に突いて會釋を爲る。

「失禮します。」

勝彌は重勝に案内されて、玄關から右へ入つた座敷らしい入墨の間に通された。其隣室の茶の間らしい室との間の唐紙は開けてあるけれども、其處の灯を座敷に奪つたので、長火鉢の炭火がほつと明るく見えて、元二が小聲で何か云つて居る様子だ。

「元二や、其處に燈火を點けて、それから先生に火鉢を早く上げなさいやア不可いよ。」重勝

は茶の間の元二に聲を掛けて置いて、

「お寒いところを能く御入来下さいました。元二を種々御引立下さるさうで、彼も非常に喜んで居ります。」

「いえ、御引立て申すなぞと、却々其様事は出来ないます。」

「何卒、今後も宜く御願ひ申します。何卒鳥渡お待ちを。」と、重勝も茶の間へ行つた。

美都子の誕生日だと云ふのに、美都子も其母も居らず、家内の様子が何だか何の準備もないのらしく、元二等三人のこそ〜話が、勝彌には氣になつて、面白くない感じが爲て居るのである。

炭のぼちりと弾ねる音がしたので、勝彌が見返ると、元二の祖母らしい老女が火鉢に火を移し掛けたところで、面長な、鼻の高い、切髪の首から上が眞暗な中にはうツと浮いて見えるのである。

「元二や、此火鉢を先生へお進げなさい。」

老女の聲がすると、元二は小形ではあるが、桑の角火鉢を持つて座敷へ入つて来た。

「先生、如何も不整頓で面目ないです。母も妹も今少時間まで待つて居たさうですが、お入來が餘り遅いから、其間に鳥渡行つて來るつて、湯屋へ出掛けたんださうです。」

「其様事は如何でも可いがね、先生くには閉口するね。」

元二は莞爾笑つて、

「ですがね、宅では一同で先生と呼ぶ事に極めてるんですから、今夜だけは勘辨して下さい。」

50

勝彌が元二へ尙ほ何か云はうとした途端に、茶の間にはツと洋燈が點いた。それと同時に格子戸の開く音が爲た。

「先生、妹が歸りました。」

元二は漸と安心した様な顔を爲た。

「美都子、歸つたのかい。」

元二が聲を掛けると、軽い調子の男の聲で、

「元二さん、御父さんはお在宅。」

「美都子かと思つたら長谷さんだ。」と、元二は茶の間を見返り、「父さん、長谷さんが御入來ですよ。」

重勝は直ぐに玄関へ立つて行つて、

「長谷さん、お上がりなさい。」

「難有う。」

と云つた後は、二人がひそ／＼談話を爲て居る様子であつたが、暫時してから重勝の聲で、

「種々御配慮で、大きに難有いです。此上とも尙ほ宜しく願ひます。兎に角上つて下さいな。」

「お客來の様ですね。」

「いえ、些も差問の無いお人です。」

「では。」と、長谷と云ふ男は上つた様子で、「今夜はお寒うござな。」と、俄に顔上げる様な聲を爲ながら座敷に入つて來た。

「元二や、長谷さんに座布団をお上げ。」と、命けて置いて、重勝は茶の間へ行く。

「長谷さん、お敷きななつて。」

「はい難有う。」と、座布団を敷きながら勝彌へ目禮する。

勝彌も目禮を返したのみで、膝の前の火鉢を前へ押出した。

「長谷さん、お當りなさい。」と、元二は茶の間を顧みて、「父さん、今一つ火鉢に火を入れて頂戴。」

「はいよ。」と、重勝は押入から火鉢を出しに掛つた。

勝彌は此家の様子が何だか變に思はれてならぬ。元二の父には逢つたけれども、祖母なる人は、界の唐紙が半閉められたから、前に火鉢の火の餘光にちらと見たばかりで、其人柄を観察する便を失つて了つた。母と妹は家に居らず、今来た長谷と云ふ男は、可厭な眼付で、商人らしい風體でありながら、さうらしく無い様にも見えて、衣帯の知れない怪しな奴だ。長谷ばかりでない、此家の人々から何だか衣帯が知れぬ。今になつて考へると、自分が元二の美貌にして薄命なのに同情した、其可否から疑はしくなつて来て、紙巻簾を吸ひなが

ら頻りに考へて居た。

「元二さん。」と、長谷は呼掛けて、「御母さんは御留守ですかい。」

「母は美都子と湯へ行つたさうです。」

「あゝ成程。」と、長谷は心得た様に首肯した。

途端に門の耳門の開く音がして、おゝ寒いなぞと云ふ女の聲が聞こえる。

「先生、今度は美都子です。」

長谷はじろりと勝彌を見る。勝彌は何だかきまりが悪い。元二の今の語を、何も事情を知らぬ者が聞いたら、美人とか云ふ噂の美都子に意があつて、此家に來て居るのだと思ふも知れぬ。現に此處に居る此長谷と云ふ男も、自分を其様風に邪推して居るかも知れない。それも關はぬとしたところで、何だか面白くないと云ふ様な感情が、頻りに發つて來るのである。

格子戸が開くと、元二の母らしい女の聲で、

「美都ちゃん、お客さまだよ。久能木先生かも知れないよ。お前さん、前にお上り。」

美都子の返辭らしい聲は聞こえなかつたが、二人の足音が壺所の方から茶の間に入つた様子で、何となく賑かになつて來た。

茶の間では呷いて居るのであらうが、其聲が座敷へ漏れるのだ。

「美都ちゃん、其火鉢を座敷へ持つてお行で。」と云つたのは、母らしい聲だ。

「私。」とばかりで、後は聞こえなかつた。

「困つた人だねえ。」

火鉢を持つて突と座敷に入つて來たのは、髪を櫛巻にした、色の白い、美しい顔の、何處か意氣に見える、年輩二十七八の婦人である。

此婦人は云ふまでもなく元二の母のお瀧である。先づ持つて來た火鉢を長谷の前に置き、態度も語調も馴々しく、而も粗略で、

「長谷さん、お寒かつたでせう。」

「いや如何も。」と、長谷は脂ぎつた丸顔の毛の薄い前頭を押へた。

お瀧は直ぐに膝を勝彌に向けて、両手を突いて丁寧に叩頭を爲ながら、

「先生、能く入來ッしやつて下さいましたね。此風ですから、如何かと思つて居たので御在ります。」

「先生、母です。」と、元二が側から紹介する。

「さうですか、僕は久能木勝彌です。」と、勝彌は更めて會釋を爲る。

「元二を御親切様に、種々御世話下さいますさうで、難有う御在ります。」と、また丁寧に叩頭を爲て、懸て頭を上げて莞爾笑つた様子で、勝彌の眼には何だか下卑く見えた。長谷は何と思つたのか、勝彌を見ながらお瀧に對ひ、

「何方で居らっしゃいます。」

「此方ですか。」と、お瀧は軽く受けて、「久能木さんと仰有つて、元二の兄さん見たいな方です。」

「は、さうですか。」と、長谷は勝彌に丁寧に會釋を爲て、「私は長谷徳三と申しまして、柏木さんとは御別懇に願つて居りますので、何卒、以來御懇意に願ひ申します。」

「私の方からこそ。」と、勝彌も會釋を返す。

「先生、長谷さんは、元二の叔父さん同様の方です。種々御世話になりますので、よ。」とお瀧は二人を等分に見て、また軽薄らしい笑方を爲た。

元二は不平らしい眼付をして、睨む様に母の横顔を見て居る。

勝彌はお瀧の様子に何となく不快を感じて居たのに、前に自分を長谷へ紹介した時には、元二の兄さん見たいな方だと云ひ、今又長谷を自分に紹介する時には、元二の叔父さん同様の方だと云ふ。長谷と柏木家乃至元二とは何様な親密の關係があるか知らないけれども、自分と元二との關係は昨今の事で、兄見たいな人と云はれる筈は無いのだ。其を平氣で云つて居るお瀧の様子に、一入不快の感を深くして、早く此家を辭したい様な氣が頻りに動いて來た。

「柏木君。」と、勝彌は小聲で元二を呼掛けて、「まだ風は止まない様だが、餘り遅くなつても困るしね、僕は失敬するよ。」

元二は吃驚して、

「母さん、何様したの。先生はもう歸るッてお云ひなさるのに、何時まで出さないんだよ。」

お瀧も吃驚したらしく眼を睜つて、

「もう準備は出來てるんですから直さですよ。先生、まことに済みませんことねえ。もう直さで御在りますよ。」

お瀧が急いで茶の間に入つて、何やら囁いて居る様子であつたが、老女の聲で、

「美都子、お祖母さんと一緒にお行でなさい。」

「母さま、鐵坊を抱いて頂戴。」

美都子と思はる、麗はしい聲が爲たので、勝彌は覺えず茶の間を見たが、唐紙に隔てられて其人は見えなかつた。

「父さんに抱いてお戴き、母さんは此から忙しいんだから。」

「ぢやア父さん。能く睡て居ますから、覺さない様にね。可くッて。」

「よし、寄越すが可い。」

「覺さない様によ。」

「よし來た。うひ、能く寝てるな。可愛い顔をしてるぢやアないか。」

「あらッ、頬邊なんか附けちやア覺てよ。」

「大丈夫だ。よし〜。」

「重勝、坊をお覺しでないよ。」と、老女は斯う整めて置いて、「美都子やお行で。」

「はい。」

美都子が祖母と座敷に出て來さうな様子なので、勝彌は何故と自分にも分らぬながら、胸の轟くのを覺えた。

前に立つて座敷に入つて來たのは、元二美都子等が祖母の千代乃である。五十何歳らしい年輩の、髪は切下の、面長な鼻の高い、眼と口元の凛々しい、身材も尙ほ腰が伸びてすらりと高く、茶の細かい縞の糸織らしい——尤も古物ではあらうが——小袖に黒七子の、三紋——紋に汚は見えるが——の羽織を着た様が、何處にか威嚴があつて、勝彌をして覺えず居住を正さしめた。

其千代乃の肩を越して見える、垂頭いた廂髪が美都子であらうと、勝彌は千代乃が坐つた時さう思つた。

「先生、僕の御祖母さんと妹です。」

元二が紹介したので、勝彌先づ會釋をなし、千代乃も會釋して、元二が前途を宜しく願ひますなぞと吳々も頼んで、さて美都子を顧み、

「今少し前へ出て、御挨拶をなさい。」

「はい。」

美都子は其清しい眼を眩しさうにしながら、勝彌の顔を一寸仰視げて、

「入らつしやいませ。」と、清しい聲で唯一句、しとやかに叩頭を爲た。

勝彌ははッと思ひながら會釋したけれども、何にも云ひ得ないで、覺えず顔を赧めた。

「年こそ十七になりましたが、から未だ子供で御在ましてねえ、碌に御挨拶も出來ないので御座いますよ。」

勝彌は自分の事を誤はれた様な氣がして狼狽しながら、元二に呶くのであつた。

「あ、そうでした。僕は悉皆忘れて居ました。先生のお持ちになりました方は。」

「玄關に置いたです。」

「どうですか。」

「君。」と、勝彌は玄關へ行く元二に聲を掛けて、「此所へ持つて来ないで、彼方へ上げて呉れたまへ。」

「どうですか。」

元二は玄關へ行つて、それから茶の間へ廻つた様子で、

「さうかい。御氣の毒な。御祖母さまへ御目にお掛け。」と云つたのはお瀧。

「でも……。」と、元二は小聲で何か云つて居る様子だ。

千代乃は此時始めて長谷が居たのに氣付いたと云ふ體で、

「長谷さんお入来なさい。」

長谷は平蜘蛛の様になつて、

「また伺ひました。どうも御寒い事で御在りまして。」

「はい。」とばかりで、千代乃はまた勝彌の方へ向直つた。

「美都子さん、今日は貴女の御誕生日ださうですね。」

「はい。」と、美都子は手を膝に置いたまゝで會釋をする。

勝彌は未だしみ／＼と美都子の顔を見る機会を得なかつたけれども、聞いて居たのよりも想像して居たのよりも遙に美しい乙女で、未だ曾つて是ほどの美人を見た事がない。元二は男として、美都子は女として、能くも斯う世に優れた一對の兄妹が生れたものだ。此一對の美しい兄妹を生んだ両親は、何とやら好ましくないけれども、祖母は流石に何千石の旗下の家に成長つた人らしく、兄妹の祖母として相應しくも亦奥床しくも思ふので、前に早く歸去りたかつた意は何時か消失せて了つて、何だか樂くてならない様に思はれて来た。

「美都子。」と、茶の間から元二が呼ぶ。

「はい。」と、茶の間を見返る。

「鳥渡此處へ来るんだ。」

「はら。」

茶の間へ立つて行つた美都子の後姿も、勝彌には矢張美しかった。

「あら私に。」と、美都子の嬉しきうな聲がする。

「御祖母さまへ御目に掛けて来な。能く禮を云ふのだぞ。」と云つたのは重勝だ。

「はら。」

廳で座敷に入つて来た美都子の手には、彼のスタアの嚢とシウクリームの袋とが捧げられて居る。勝彌は何だかままりの悪い様な氣がしてならぬ。

「御祖母さま、先生から美都へ賜つたんです。」と、座敷に入つて来た美都子は、嬉しさを包みきれない眼に祖母の顔を見ながら、勝彌の贈物を見せて、さて勝彌に向ひ手を支いて、

「先生、難有う御在ます。」

「いえ。」とばかりで、勝彌は美都子の美しさに見惚れて居る。

「まア此様に澤山に。難有う存じます。」

千代乃が禮を云ふ傍から元二が、

「美都子へばかりしちやありませんよ。御祖母さまへも御土産を下さつたんですせ。」

「まア私へもですか。實に恐入りましたねえ。元二が御世話になります上に。」と。千代乃

も丁寧に禮を述べる。

「いえ、お禮を受ける様なものではないです。」

「嬢さん、御一人では食上れさうありませんな。はははは。」

長谷が御世辭らしく斯う云つて笑ふと、美都子は顔を赧くして何にも云はなかつた。

「僕が居るから大丈夫です。」と、元二が笑ふ。

「成程、君の助太刀があつちや忽ですな。ははは。」

元二と長谷が聲を合せて笑つた時、茶の間からお瀧の聲で、

「兄さんも美都ちゃんも来てお呉れ。」

「はい。」と、美都子は直ぐ立つて行つた。

「僕もですか。」

「お前さんも美都ちゃんに手傳つて、御膳を運んでお呉れ。」

「おや〜。」

元二が茶の間へ入ると入違に、美都子が膳を運んで来て勝彌の前に置いた。

「何にも御在ませんで。」と、千代乃が語を添へる。

「美都子。」

兄が呼ぶので、美都子が茶の間へ入らうとすると、元二が膳を持って立つて居て、之を長谷の前に持つて行けと目顔で命ずる。美都子はいや／＼を爲て、兄の傍を摺抜けて彼方へ行く。

元二は舌鼓を爲て見返つて睨み付けながら、長谷の前に膳を粗略に片手で置いたので、椀が滑つて汁が溢れた。

「失敗た。」

「まあ粗忽しい。取替へてお上げなさい。」

千代乃が氣の毒がるのを、長谷は両手で押へる様な手付を爲ながら、

「いえ、幸ひに溢れませんでした。元二さんが心得てお置きでしたからな。は、は。」

「だから、僕は膳なんぞ運ぶのは厭だと云つたのに。」

元二はぶつ／＼云ひながら茶の間へ入り、母へ向ひ頻りに不平を列べて居る。

美都子が千代乃の前と、兄の座布団の前に膳を運び了ると、お満が銚子を持つて入つて来て、

「能々御入來を願つて、何にも差上る様な物もありませんで。」

「いえ、此様に種々御心配下さつては恐入りましたな。」

長谷は仰山に禮を云つたが、勝彌は會釋を爲たのみだ。其處に美都子が杯泉を持つて來て、勝彌と長谷の前に置く。

「先生。」と、お満は勝彌を呼掛ながら美都子を見返り、「御酌を爲さい。」

「はい」と、美都子は両手で不器用に銚子を持つて、勝彌の前に進む。

「どうぞ彼方から。」と、長谷へ譲る。

「いや、何卒先生から。」と、長谷も譲る。

勝彌は見るも眩しいやうに美しい美都子の顔を凝乎と見ながら、

「御祖母さんから御始を願ひませう。」

お満は首肯し、

「御母さん、貴方が御始なさるが能う御座んすよ。」

「では、私がお毒試役を。」

千代乃の出した猪口に、美都子は満満と注いだ。

「先生、お先へ失禮致しました。何卒御座んに。」

勝彌は座順と云ふので猪口を出すと、美都子は餘り謹慎過ぎた爲か、銚子を持つ手が顫へて、かち／＼と縁と縁とが觸れて鳴るので、顔を眞赤にした。で、長谷へ注いで遣ると、銚子を置いて、ついと茶の間に隠れた。

千代乃はお瀧を顧みて、

「元二は如何お爲かね。」

「兄さん、此處へお居で。」

お瀧が聲を掛けると、元二は美都子に向つて前の不平をぶつ／＼漏して居た。

勝彌にも元二の口小言が聞こえるので、笑を含みながら、

「元二君、此處へ來たまへ。君が來ないなら、僕はお暇するよ。」

「今行きますよ。」

元二が急いで出て來て勝彌の傍に坐ると、勝彌は小聲で、

「彼様くだらない事を、何時までも云つてもや不可ね。も少し男らしくなせやア……。」と、笑ひながら其顔を見て、

「自分の過失を他へ嫁すなんて事は、僕は嫌ひだね。」

「なに其標譯では無いんですが。」と、元二は顔を赤くしながら、何やら解ぬら事を口の中をぶつ／＼云つて居る。

「我儘で困るので御座いますよ。」

お瀧が斯う云つたので、元二は屹度見て何か云ひさうにしたが、勝彌を怖れて唯顔を脹らした。

勝彌は美都子が出て來ないので、何だか淋しい様な氣が爲て、眼を茶の間へ馳せやうとして、千代乃の後に何人が居るから見ると、何時の間にか來たのか美都子が居るのだ。

勝彌は未だ美都子の顔をしげ／＼と見る機會を得なかつたから、唯美しい一眩い様に美

しい人だと思つて居るばかりで、眉目も一々其美しい點を味ふ暇が無かつた。今度は思つたが、千代乃の蔭に潜む様にして居るのだから、やはり能く見る事が出来ないで、もごかしくてくならぬ。

一方にはお瀧が長谷と談話を爲て居る。

「いえ、却々上等でさア。此位な鮓は如何致して、容易に山の手の魚屋なんか持つてやしませんや。さうですな、昨日清水さんの御隠居さんのお宅で頂戴致したのと、此お宅の御魚軒とは産地が一つだと思えて見えて、如何も結構ですな。」と、魚軒をつると音をさせて好味さうに口へ入れる。

「清水さん我々とは比較物になりませんよ。」と、お瀧は意味ありげな眼に凝乎と長谷の顔を見合せて、「昨日は他の御用で行らつしやいまして。」

長谷は額に手を置きながら、

「いえ、やはり彼一條で参りましたので。」

「さうですか。嗚ぞ御迷惑でしたらうね。」

お瀧は鳥渡千代乃を見返つた。

長谷は頭を掻き〜、

「實に困ツ丁ひますよ。彼の御隠居にも、口を酸ばくして断つても、却々承知致されませんでな。」

「ぢやア、依然美都子を、養子に欲いつてお云ひなさるんですか。」

「さうでかすよ。」と、長谷は其昔の長い三白眼で、人々の様子を一寸窺つては鳥渡眼を崩しながら、「長谷さん、お前さんが一旦受合つたもんだから其處には何様條件でも附けようから、柏木さんに無理にも今一度願つて呉れる様にして云はれましてな、さう〜謝絶りされなくつて、また伺つた様な次第でしたな、實に弱ツ丁ひますのでな。」

お瀧は何とも云はないで千代乃を見返ると、これは不機嫌な顔を爲ながら、丁度猪口を唇へ當てたところだ。

元二が憤然たる語調で突如に、

「清水ッて爺も没分曉い爺だ。」

「何だねえ、お前なんぞの知つた事ではないのだよ。」

「何だつて阿母さん、僕の知つた事ぢやないつて。」と、元二の顔は眞赤になり、美しく優しい顔に角を立てる。「何故僕が知つた事ぢやないのだ。阿母さん其譯をお云ひなさい。何故僕が知つた事ぢやないんだ、さア。」

勝彌は元二の見脈が親に對する所作でないと思ひながらも、黙つて聞いて居た。

「何も、其様にお怒りでなくつたつて可いぢやないかね。」と、お瀧は伏目になつて、煙管に煙を塞めながら、「お前さんには迂濶口も利げやアしないよ。」

「其様事を云つて誤魔化さうたつて。」と、元二は息遣まで荒くなつて、「僕が知つた事でないつて云ふ其譯を、母さんさア、さア云つて聞かせて下さい。美都子は僕の妹だ。其妹の大事に、兄が口を出せないつて事があるもんか。清水ツて爺が、没分曉いから没分曉いて云つたんだ。遣れないつて云ふのには是非呉れるなんて、人間を何だと思つてるんだ。美都子は遣らないぞ。清水なんぞに美都子は僕が遣らない。決して遣らない、何だ、母さんなんぞが。」

「元二君、母さんに禮を失しちや不可よ。」

勝彌が元二を窘めて袖を曳いた時、茶の間の重勝が叱る様な語調で、

「元二、何を大きな聲を爲る。」

「母さんが没分曉いからです。」

「何であらうと、母に反抗するのみならず、其態度は何だ。父さんや母さんはな、お前達を樂に爲て遣りたいと思ふから、種々氣を揉んでるんだぞ。美都子を養女に欲いと云ふ清水さんにはな、長谷さんと計畫してる、事業の資本を出して貰ふ積だから、謝絶るに付けても、其處には綾もあるものだから。」

元二は嘲ける様な語調で、父の語を遮り、

「だから、僕は父さんの爲る事が氣に食ないんだ。」

「何だぞ。」

重勝が躍起となつたのを、お瀧は見返りながら、

「所天は黙つて居らッしやる方が能う御座んす。」

重勝はぶつ／＼云ひながらも、再び元二と争はうとはしなかつた。

勝彌は此時不圖重勝に付いて考へた、苟くも一家の主たるべきものなら、第一此酒宴の席の主人公であるべき筈なのに、茶の間に小兒の守を爲て居るのみならず、子たる元二には語を返へされ、妻には制せられ、其儘黙して了ふとは、何ぞ云ふ權威の無い事であらう。お瀧の婿に來た人だとは聞いて居るが、其にしても餘り無氣力だ。其を能い事にして、元二が語を返へすと云ふのは、子として何たる不埒な事であらう。此様家庭では、子供に學問を爲せも爲まいし、子供も亦た爲も爲まい。それに、美都子もさうだ。兒玉から聞いたところとは意味が違ふけれども、何等かの犠牲に供されやう／＼としつゝあるのだ。世間に能くある事とは聞いて居たけれども、眼前に見聞するのは今が始めてだ。たま／＼美しく生得た／＼めに、却つて此様悲惨な境に置かれるとは、實に氣の毒でならぬ。生活の困難からではあらうけれども、其愛兒を犠牲にしなくとも、何とか手段がありさうなものなのに、なぞと考へて、屹度美都子を見ると、美都子も身動もしないで居る。

お瀧は長谷の前に膝を進めて、

「貴方こそ御迷惑ですはね。お一つ、頂戴致しませう。」

お瀧が長谷から猪口を受けたのを、千代乃はじろツと見ながら、

「長谷さん、美都子は私の大事な孫ですから、清水へ遣はす事は、私から今更めて謝絶りますから、お前さんから先方へ確と斷つて下さいよ。」

「はい。」と、長谷は居住を直した。

「重勝」と、千代乃は茶の間を見返つて、「私なんぞは此上貧乏してもね、其は運だと諦めるから、資本を出して貰ふ爲に、美都子を他家へ遣はさうなぞと、忘れても思つてお呉れでないよ。今でこそ何だけれども、徳川氏の外國奉行を勤めた柏木攝津守の孫をお前……。」と云掛けてはろりとなつて、「長谷さん、確と斷つて下さいよ。」

「はい。」と、また畏つた。

一座は森として了つた、途端に柱時計が九時を報つた。

「や、もう九時ですな。僕はお暇致します。大きに御馳走になりました。」

勝彌が座を離れると、千代乃元二を始め一同、今暫時と止めたけれども、強て辭して門

を出た。

幸ひ風は止んだけれども、寒氣は依然骨を侵す様だ。門を出ると、道は眞暗だ。足元を危みながら、其眞暗な中を疑乎と見ると、美都子の顔がありありと浮いて居る。其人を眼前に見て居た時より一入ありくと、暗の中に浮いて居るのだ、勝彌は何とほしらすぞつとして、胸が戦いた。

(八)

勝彌が四谷船町の柏木を辭して、飯田町四丁目の下宿山田に歸つて來たのは十時前であつた。

茶の間を差覗くと、お喜和は例の通炬燵に埋れて睡つて居るらしく、お須壽は何處へ行つたのか姿が見えず、何だか森として居る。

平生は十時が十一時になつても、何室かで話聲が爲て居るのに、今夜は如何したのであらうと、袂を探つて燐寸を取出し、既に火を摺らうとした時、室内から聲を掛けたのはお須壽だ。

「御歸宿りなさつたんですか。」

「あうた。」

勝彌が開の撮を捻ると、ぱつと内へ開いて、煌々たる洋燈の火光が眩いやうだ。湯沸から盛に蒸氣を吹いて居る火鉢の傍に、新聞紙を讀んで居たらしいお須壽は屹度見返つて、直ぐに莞爾笑を含んで、

「御歸りなさい。」

家外の寒氣に酒の酔も醒掛けて居た勝彌は、室内の温かさに酔が戻つた様な氣がしなから、

「これは温暖だ。」

「家外はお寒いでせう。」

「うむ。」と、勝彌は首肯き、机の前に坐つて、襟巻を脱りながら、「四谷見附で電車を待つてゐる間なんぞ、足の爪先が切れさうだつた。」

「其位な事は詮方がありませんは。」

お須壽は笑を含みながら睨む様に見える。

「何故詮方が無いんだ。」

「だつて、樂みの後には苦みありですは。」

「如何して。」

「如何してツて。お氣をお付けなさいよ、鬚から涎が垂れてるぢやありませんか。」

「鬚から……これか。」と、勝彌は襟巻を深くした爲に、此五六日剃らなかつた鬚に氣息が露と宿つて居るのを、羽織の袖で横様に拭きながら、「ははは。涎を見る奴があるもんか。」

「だつて、涎に違ないは。」

「如何して。」

お須壽は笑を含んだ眼に凝乎と勝彌を見て、暫時黙つて居たが突如に、

「美人でせう。」

「何がだね。」

「美都子さんがなの。」と、嫉ましい眼に凝乎と見る。

勝彌は大きく首肯いて、「美しいね。實に美人だ。」

「だから、涎が垂れたんでせう。おはは。」と、聲には笑ながら、眼の嫉の色は「入濃くなつた。」

「馬鹿な。」と、戻つた醉に眼に潤を有ちながら、「其様滿らない事なんぞ云はないで、僕に茶を入れて飲まして呉れたまへ。」

「お茶なんかお止なさるが可いは。」

「如何して。」

「切角美都子さんのお酌でお酔ひなされたお酒が醒めてよ。私そんな罪な事を爲るのは

不好よ。」と、兩手を袖口に引込めて、其を胸に合せて、異様な笑を含んだ眼で勝彌の顔を見て居る。

「君は今夜如何したんだ。」勝彌が茶筒を取らうとすると、お須壽は其を強奪して、眼を据ゑて睨みながら、

「本當に食上りたくッて。」

「だれが此様事に虚言を云ふもんかね。」

「ちや、何様事に虚言を云ひななるの。」

「何様事にだッて、僕は虚言を云ふのは嫌だ。」

「ふ〜。」と、鼻頭で笑つて、「他の事は知らないけども、美都子さんの事では、早晩に乾度私を欺かしてよ。」

勝彌は苦笑を爲た。

「當つたもんだから。」

お須壽は嘲ける様に笑つて、茶筒をほんと言を爲せて脱いて、茶を入れに掛つた。

勝彌はお須壽が茶を入れて居る中に睡くなつて、机に片臂を倚せて頬杖を置いて、眼を閉らうとしたのをお須壽が早くも認めて、

「夢にまで御覽なさりたくッて。」

「何をかね。」

勝彌が尙ほとろりとした眼を爲て居るので、お須壽は口惜くなつて大きな聲で、

「はい、お茶。」

「お、吃驚した。隣室で聞いたら何と思ふだらう。」と、始めて眼をはつきり明いて、湯呑を取上げて一口喫んで、

「あ、旨い。辛と氣がはつきりした。」

「本當に貴方は憎らしいは。」と、お須壽の聲は尙ほ高い。

「兒玉君が聞いて、可笑がつてるだらう。」と、快さうに茶を仰飲ひ。

「貴方の競争者はお留守よ。」

勝彌は眼を丸くして、

「僕の競争者？誰の事なんだ。」

「兒玉さんよ。」

「兒玉が競争者。何の競争者なんだ？僕が何を競争してると云ふのかね。」

「あ、遠慮けて見せて。」と、高く笑出して、而も勝彌の顔を指しながら、「そんなに御遠慮けなさらずに云つたつて可いは。」

勝彌はお須壽の所作に勃然としたが、相手にするでもないと思つて苦笑をしながら、

「須壽さん、満らん事を云ふもんじゃないよ。」

「ぢや、お解りなすつたんだね。」

「何がだよ。」

「競争して居らッしやること。」

「いや、解らない。」

「貴方が解らないだつて、兒玉さんが競争して居らッしやるから爲方がないは、兒玉さんは其れはね、ぶっく云つて、失敬だくッて云付けて、何處か出て行らッしてよ。」

「益と解らない。須壽さん、其様に謎見たいな云方を爲しないで、僕に解る様にはッさり云て呉れたまへ。僕が兒玉に怒られる筈はないんだ。何も彼人の感情を害する様な事を爲た覺はなしな。」

「いまに覺がある様になつてよ。」と、襟ツたい様な笑方を爲る。

「須壽さんの云ふ事は、僕には解らない。もう十一時だらう。」

「そんなに邪魔になさらないだつて可いは。」

「今夜は如何か爲てる様だね。」

「さうかも知れなくッてよ。餘り口惜いんだもの。」

勝彌は今は面倒臭くなつて、相手にならずに敷島に火を點け、眉を懸せながら伏目になつて煙を長く吹いて居る。其様子がお須壽にも心元なく思はれて来て、口惜いからつい、調戲つただけれども、本當に怒られたら如何爲よう。今の中に謝罪らうかしら……謝罪の口惜い。もう調戲はないで、兒玉さんが怒つた事を其儘話して、其上で謝罪の事に爲よう。同じ謝罪にしても其方が謝罪易ツて可いと思ひながら、勝彌の横顔を熟く見て

居た。

暫時してから、

「兒玉さんが怒ッてらしたしたのは、貴方の事ぢやなくッてよ。」

勝彌は敷島の吸殻を灰に挿込みながら、

「さうだらう。僕は彼人の感觸を害した事なんざ無いんだもの。」

「柏木の家の奴等が失敬だッてね……美都子の誕生だ云ふので人を招待んなら、昨今悪意になつた久能木君よりか先づ、自分を呼ぶべきぢやないかッてね、それは大變な怒り様でしたは。元二を久能木君に紹介したのは何人だ。其紹介した乃公に對しては、室の前を通る時に義理一遍の會釋をするばかりで、久能木君の室に入浸ッて居やアがる。彼様様元二に附く奴は嫌だ。明日から元二とは語も交きやしないッて、私と阿母さんに散々愚痴を云ッてね、ぶいと家外へ出て居らしたのよ。」

お須壽は勝彌が何と云ふかと、凝乎と見て居る。

「どうかね。兒玉の云ふ所にも一理ある様だ。併し、」と、暫時考へて、「いや、僕が須壽さん

に論じたッて詮様がない。で、何かい、僕の事も何か云ッてたかい。」

「うん、」

「だッて、須壽さんが先刻云ッてた事から想像すると、僕の事も何か、」

「あれは私が悪かつたんだは。謝罪るから勘忍して頂戴。」と、笑顔を作つて一寸頭を下げて、凝乎と勝彌の顔を見た。

勝彌が呆れてお須壽の顔の見て居るので、お須壽は一入濟まないと思ひ、

「久能木さん、勘忍して頂戴よ、私眞固悪かつたんですから。」

「何だッて、彼様滿らん事を云つたのかね。」

「何でッて事は無いんですは。唯、」と云掛けて、顔を赤くしながら笑つて居る。

勝彌は漸次睡氣が嵩じて來たので、

「お須壽さん、其様事はもう可いとして、僕は睡くなつて來たから、階下へ行つて貰はうぢやないか。」

お須壽は何だか追追られる様な氣がするけれども、勝彌の眼を見ると如何にも睡むさう

である。此上何か云つて怒られては大變だと思ふので、素直に下階へ行く意で、

「ぢやア、お床を敷つて上げてよ。」

「床は僕が敷るから可う。」

「うう。」

とは云つたが、尙ほ容易に階下へ行きさうな様子はなく、睡むがつてる勝彌の顔を凝視めて居たが、

「何方がお美しいんですか。」

「何がだね。」

「美都子さんと兄さんと。」

「ううさ。」と、睡氣も去つたかの様に目を清しくして、「女だけに、兄さんより可愛嬌があるから、一層美しく見える様だ。」

「兄さんよりかお美しくツちや、皆さんが大騒を爲さる筈ね。」と、お須壽は太息を吐いて、「美しく生れるのは得ですはね。」

「婦人は然様だね。」

お須壽は太息つくづくと、

「私なんか駄目だ。」

「如何して。」

「だって、此様お龜なんか……つくづく可厭になつたよは。」と、またしても太息を吐く。

お須壽を美都子に比ぶれば眞箇お龜に遠ひないと、勝彌は伏目になつて居るお須壽を見て居たが、世辭を云ふ事の嫌ひな男だから黙つて居る。

「眞箇可厭になつて了つてよ。」と、また斯う繰返した時は涙含んで居た。

勝彌は氣の毒だとは思ふけれども、取つて着けた様な事も云へないから尙ほ黙つて居た。

階下の柱時計が十一時を報つた。途端に表の格子戸の開く音が遙かに爲る。

「須壽さん、階下に何人が歸つたんぢやアないかね。」

「さうかも知れないは。」と、尙ほ悄然と考へて居て立上らうともせぬ。

「何人も居ないのか。お須壽さんは居ないのか。」と、酔つて居るらしい聲音は兒玉權二だ。

「あらッ兒玉さんよ。」と、お須壽は可厭なと云ひたさうに眉を擡せた。

梯子を上る足音が、さも仰山らしく聞こえ、踏外したかと思ふ様な音も一二度したが、辛と上り了つたらしく、廊下を大跨に衝に歩み來る音は根本も踏抜かれさうだ。

「やア、久能木君が歸つて居られるな……久能木君〜。」

「黙ッてらしゃいよ、酔ばらッてちや尙ほ大變だから……洋燈を消しませうか。」

「馬鹿な。」

勝彌がお須壽を制した時、權二は既に開の外に來て、

「久能木君、寢たんですか、え。久能木君、寢ッ寢、寢たんですか。」

「いや、入りたまへ。」

「お止しなされば好いのに。私行つてよ。」

お須壽が開を内から引くのと權二が外から押すのと同時だつたから、權二があまされて疊にのめつて倒れた間に、お須壽は室外に飛出して後を閉めて、拔足を爲て階下へ行つて了つた。

權二は辛と起上つて、勝彌を見て高笑を爲し、

「やア失敬。酔つてるもんだからつい……ご〜ごうも失敬……おやッ。」

今其處に居たお須壽が見えないので、不思議さうに室内を見廻して居る。

「久能木君、今須ちやんが居た様だつて、如何したです……奴、逃げよつたかな。」

「階下へ行つたですが、何か用がおありですか。」

「僕が來たもんだから逃げよつたんだな。」と、權二は不快らしい顔をしたが、直ぐに笑出して、「僕は何だ。僕は如何も行かんで。何も其の、何時も其の滿らん事を云つて調戲うもんだから、何時でも其の逃げられて了ふんだが、何も其の、」と云ひ〜火鉢の傍に這寄つて、勝彌と顔を見合すと、忽ち大聲に笑出した。

勝彌は苦笑を爲ながら、

「大分御機嫌ですね。」

「え、御機嫌だつて。戯言云つちや困るよ。君、自暴酒に酔つたつて、何が御機嫌な事があるもんか。君こそ好御機嫌だらう。」と、突懸る様に云つたが、忽ち語調が變つて、「失敬〜、

君の知つた事ぢやなかつたんだ。だけれどもね、君、失敬な奴等ぢやアないか。君を呼んで僕を呼ばない、實に怪しからんぢやアないか。柏木の奴等に、一人だつて義理を知つてる奴が居ないんだから詮方がないけれども、何も怪しからんよ。で、何ですか、君は柏木へ行つたんですか。』

「さうです。今少前に歸つたところです。』

「僕の事を何か云つてたでせう。』と、肩を怒らして、はつむ呼吸を飲みながら、乾度勝彌を見る。

「いゝえ、君に就いては何も聞かなかつたです。』

「僕の事を何も云はない……本當ですか、君。』

「噂も無かつたです。』

「噂も。』

權二は張合抜の氣味で、首を捻り／＼考へて居たが、

「久能木君、君は柏木の家庭を如何觀察したですか。』

「まア。』とばかりで何とも云はない。

「今夜誰々居たんです。』

「さうですな。僕は彼家の人達を能く知らんですが……併し、大概居られた様です。』

「婆さんが居たでせう。』

「元二君の御祖母さんなら居られたです。』

「彼が喰へん婆さんでね。』

「如何喰へんのです。』

柏木の人々の平生からの其性質を知るのに、まこと得難い便宜だと思ふので、勝彌は覺えず膝を進めた。

「如何と云つて、慾張切つてるんだからね。』と、冷笑つて居る。

「慾張つてるッて、例の美都子さんの事ですか。』

勝彌は日外權二が元二の前で罵つた美都子の一條からではないかとも察したから、態と斯う云つて見た。

「無論それもあるですが、いやに見識が高くて、母大で、二言目には外國奉行柏木攝津守が出るから恐れる。」と、また冷笑ふ。

「唯それだけですか。」

勝彌の問が権二には何だか異様に聞こえた。

「唯とは。」

「唯それだけならば、彼老人の經歷から見ても、強て咎めるにも及ばんすね。」

「君は未だ能く知らんから、其様事を云はれるけれども。」

「では、君が能く知つてお居でるところで、今お話しの外に何様事があるんですか。」

「そりや種々あるさ。」と、激した様に云つて、忽ちにやりと笑つて、「話したつて満らんから止すですが……母親は居たんですか。」

「さうです。」

「彼女がまた牛賣損の方でね。」と、また冷笑ふ。

勝彌も此には覺えず首肯いた。

「それから、御心好の父親が居たでせう。」

「元二君の父さんですね。居られたです。」

「いやはや、意氣地がなくなつて可愛相なものなんだ。」

勝彌は有繁に首肯きはしなかつたけれども、権二が嘲けるのも無理は無いと思つた。

「それから、馬鹿長は居たですか。」

「馬鹿長ですと。」と、勝彌は誰の事を云ふのか解らないので、凝乎と権二を見る。

「これがまた難物でね、一家庭に能くも彼様に揃つたもんですな。はッはッはッは。」

権二は大口を開いて笑ふのだ。

勝彌は権二が柏木一家に悪感情を懐いて居る事は、日外元二を罵つたのにも今夜の語氣に依つても充分察して居るから、彼が云ふ所の總てを信じようとは思はぬが、中には自分にも首肯かるゝ事があるので、今馬鹿長と云ひ難物を評した其人も、恐らく斯く罵らるべき多少の缺點を有つて居るのであらうが、元二や美都子と何様な關係の男であらうかと危みながら、

「雜物と云つて、如何した人ですか。」

「君は逢はんかつたですか。一度逢へば直ぐ馬鹿氣た所に見える男でね、柏木攝津守さまの妾腹の馬鹿殿長夫と云ふんだ。馬鹿長は僕が奉つたんだが、實際雜物さ。今度逢つたら、君も驚くでせうよ。」

「ぢや、元二君の叔父さんですか。」

「さう。叔父なんだ。君聞きたまへ、能く揃つたもんだ。」と、權二は指を折りながら、
「尊大な婆さんに、牛賣損のお袋に、意氣地なしの御父さん、我儘者の元二に叔父の馬鹿長と、能く揃つたぢやないか、君。」と、一本二本と指を折り了つた拳頭を、不器用に勝彌の眼の前に突出しながら大笑する。

勝彌は苦笑するより外なかつたが

「それで如何ですか、元二君の妹さんは。」

「美都子かね、君。」と、權二は猜忌の眼を鋭くして、君は何と見たです。」

「僕には唯美しい處女と見えただのです。君は如何見てお居下すか。」

「さう、」と、權二は眼元にのみ笑を見せて、「まだ十七なんだから、何人にも然様見えるですね。」

勝彌には權二の語が他に何か意味があるらしく聞做された。

「も少し年が長つてたら、如何見えると云ふんですか。」

「も少し年が長つてたらッて。」と、權二は心中稍狼狽しながら、故らに澄した顔をして、

「それは未來の問題の様だ。」

「では、も少し幼かつたら？」

「幼かつたら如何ですッて。」

「いや、まだ十七だから何人にも然様見えると云はれた君の語が、僕には解らないから御尋ねするんです。」

權二は益々窮しながら、

「いや、別に意味は無いんです。」

「別に意味は無い。」と、勝彌は頻りに考へて居たが、「彼家の人を尊大だの、我儘だのッて

五人までも數へた君が、美都子一人を取除にされたのにも、何も意味は無いんですか。」「大層難しくなつて來た。」と、權二は異様な笑を含みながら、「君はまた大變委しく聞きたがるんだね。思召があるなら周旋しようか。」と危く云はうとしたが、既に殆んど醉が醒めて居たから、さうまでは云得ないで、にや／＼笑ひながら勝彌を見る。

勝彌も微笑みながら、

「強ひて聞く必要は無いですが、君が數立られた様な人々の中に置かれた、僅か十七にしかならぬ白絲の様な美人の未來を想ふと、何だか氣の毒でならんですね。だから、僕が聞きたかつたのは、君が彼の處女の性質をですな、器に従ふ水の様に意志が弱いか、或ひは如何なる誘惑にも打勝つほど意志が強いかなのです。意志の弱いと強いとは、彼處女の未來の運命に、大關係があらうかと思ふんです。」

「さう。」と、權二は一寸考へて、「剛情な所はあるけれども、何しろ未だ十七なんだから……今の所では先づ氣の毒なものさ。併し、それも、いや僕なぞが何を云つたって駄目／＼。お、寒い。君、何時だらう。」

途端に階下の柱時計が十二時を報つた。

「驚いた、十三時。君、大變御邪魔したです。失敬／＼。」

權二は自分の室へと辭し去つた。

「氣の毒だなア。」

勝彌は尙ほ机に倚掛つて、柏木一家の事を、別けて美都子の事を考へて居た。

(九)

勝彌は何處かで誰か論争つて、其喧騒が煩騒くつて、黙れツと叫んだと思ふと眼が覺めた。見れば、元二が机に向つて謄寫物を爲て居る傍に、お須壽が來て話して居るのだ。窓の障子には眩いほど日が映つて居た。

「君、來て居たのか。大變に早朝來たもんだね。」

「早朝なんて、既う十時が報つてよ。」と、お須壽が口を出して、「柏木さんは、九時前から勉

強して居らしてよ。」

「さうか。既う十時過ぎか。随分睡た睡た。」と、勝彌は抱巻から兩手を高く出して伸を爲しながら、「柏木君、昨夜は大變御馳走になつたッけ。歸宿つてからまで酔つてたよ。」

「さうでしたか。先生は一向飲上らない様だッて、御祖母さんが云つてましたッけ。父からも母からも宜敷く御禮を申しました。」

「いや、僕の方からこそお禮を云はなきやならない。」

お須壽はもう嫉ましさうな眼をして二人の談話を聞いて居たが、邪魔したさうに口を出して、

「もうお起きななつたら可でせう。」

「さう。起きても可い。」と、また伸を爲ながら、「君、今朝兒玉君に逢つたかね。」

元二は机に筆を置いて、

「いゝえ、僕が来た時は既う出勤された後でした。」

「兒玉君が居る時だッたら、僕の方へ来る前に、一寸挨拶だけでもするが可いよ。」

「それは爲て居るんです。」

「なら可いけれど、僕と懇意になつたから、兒玉君に疎遠にすると思はれない様に爲たまへよ。」

「はい。」

二人の話してる様子が、まるで兄弟の様だから、お須壽は一入嫉ましく、

「貴方も苦勞性ね、兒玉さんなんか如何だッて可いちやありませんか。」

「須壽さんは、兒玉君と仲が悪いから其様事を云ふが、友人の交際は然様したもんぢやな

い。」

「はい〜。」と、能く笑ひながら斯う云つて、「お起きなさいよ。手水を遣つてらッしやる中に、綺麗にお掃除を爲て上げますからさア。」

「あゝ、あ、詮方が無い、愈々起さる譯か。」

勝彌はまた悠々と伸を爲て、突如に躍上る様に起上つた。

「あら吃驚してよ。」

Handwritten note: *Handwritten text, possibly a signature or reference.*

倉と園叢書

元二はくすく笑つて居る。お須壽は勝彌に着物まで着せて遣つて、

「さア、階下へ行ッてらッしやい。」

お須壽が楊枝齒磨手拭まで揃へて遣ると、勝彌は悠々と階下へ降りて行つた。

お須壽は元二を顧みて、

「まるで乳母さん見たいでせう。」

「貴方の親切なのは、僕感心しッちやツた。」

元二が顔を見ながら微笑むと、お須壽は覺えず真赤になりながら、

「私宅に居らッしやる方には、何方にも斯うして上げてよ。」

「見玉君にもですか。」

お須壽は忽ち眉を顰めながら、頭を振つて、

「見玉さんだけは別段ですは。」

「如何してゐるか。」

「だッて、」と、眉の皺を深くして頭を振る。

元二も首肯す。

「僕の家でも一同が嫌です。妹なんか、見玉君を見るのも厭がつてる位ですは。」

「さうでせう。」と、大きく首肯して、「誰だッて嫌ひますは。」と云つて、凝乎と元二の顔を

見て、「お妹御さんは、大層お美しく居らッしやいますッてね。」

「なアに。」と、元二は眼を翳す。

「いゝえ其様ですッて。私御目に掛りたう御座んすは。御遊にお連れなさつて下さいな、

後生ですから。」

「難有う。」

「私も上りたいんですけごも……伺つても能う御座んすか。」

「え、可いですも。」

「さう。」と、考へて居る。

「久能木先生がもう入らつしやるでせう。」

「さう、御掃除を爲るんでしたッけ。大失敗。」

自分で可笑がつて笑ひながら、元二に手傳つて貰つて、大急で掃除を爲て了つた時、丁度勝彌が上つて來た。

「好い心地に掃除が出来たね。須壽さん、有難う。」と、勝彌は室に入りながら、「今日は僕も大いに勉強せんきやならない。林に頼まれてたのに、つい忘れて居た。」

「ぢやア、御膳を大急で持つて來ませうね。」

「いや、柏木君と午時一緒に可い。」

勝彌が机に向つて硯箱の蓋を除つたので、お須壽は階下へ行つて了つた。

「元二君、女ツて煩擾いもんだね。」

元二は自分の硯の墨を磨りながら、

「此處の娘ですか。」

「さア、彼女なんぞは別して然様だね。」

「ですが、能く先生の御世話を爲てるぢやありませんか。」

「世話を爲て呉れるのは難有いが、話が煩擾いからねえ。」

「其様所もある様ですね。」

「僕は語の多い女は嫌ひだ。」

「僕だツて然様です。」

元二が膽寫し初めたので、勝彌も新聞紙を取上げて黙讀して居たが、不意に、

「君の宅に昨夜來て居た長谷と云ふ人ね、彼人の名は何と云つたッけね。」

「徳三と云ふんです。」

「ぢやア違ふ。」

「何が違ふんです。」と、元二は紙から筆を離して勝彌を見る。

「銀行の決算報告の廣告の中に、取締役長谷とあるから聞いて見たんだ。」

「銀行の取締役ですツて。」と、冷笑しながら、「彼長谷が夢にも見ない事です。」と、また寫して居る。

「さうかねえ。」と、新聞紙を投出して、

「けれども、君等とは餘程親密な關係があると思つて、君の御母さんが僕に紹介された時、

元二の叔父さん同様の人だと云はれたよ。」

「母は如彼だから困るんです。」と、耻しさうに顔を赧めて、「叔父同様なんて怪からんですよ。長谷は元來僕の家の家來筋の家に養子に來たんださうでして、其緣故で近く出入して居るんです。彼男の爲には、僕の家では何位損を爲せられたか知れないんです。僕も御祖母さんも彼奴は大嫌なんです。」

「どうも、一寸見たばかりでも、餘り好人物ではなささうだね。」

「僕の母も語が多くツて困んです。」と、覺えず太息を吐く。

「僕を長谷に紹介する時には、君の兄さん同様の人だと云はれたツけ。」と、微笑む。

元二は一入顔を赧くして、

「先生に對して失敬だと思つて、僕は彼時直ぐに云つて遣らうと思つたんです。先生が御去りになつてから、大いに云つて遣りました。先生、何卒氣にお掛けなされない様に願ひます。母には時々困られるんです。」と、また太息を吐く。

「併し、其處に深い意味があると云ふんぢやなし、唯惡意だと云ふ意味を強めただけなん

だから、答める所は無いのよ。」

「ですけれども、先生に對して。」

「なアに、僕は何とも思つてやしないから、心配したまふな。」

「本當に母には困るんです。」と、墨を磨る。

「何だね、お茶は。」

「いえ、自由に頂戴します。」

勝彌は元二に茶を注いで遣り、自分も飲みながら、

「昨夜、美都子さんの上に、面倒な問題が提出されて居たツけが、僕が辭去つてから、何か話があつたかね。」

「いえ、彼時から後では話は出なかつたんです……が、妹の事でも随分困つてるんです。それに就いて先生に、」と勝彌の顔を見て躊躇つて居たが、「先生に願ひたい事があるんですけれども……僕からはかちぢやないんです、御祖母さんからもですが……。」と口籠つて後を云ひ得ない。

勝彌は元二が意外の語に覺えず眉を蹙めて、「何様事が知らないが、遠慮しないで話して見たまへ。」

「はう。」

元二は顔を赧くしながら、何か云出さうとしては躊躇ひくして、終に云出し得ないで伏目になつた。

「君、遠慮しないで云つて見るが可いぢやアないか。僕が相談を受けても、到底應じられない事なら斷らうし、また然様でもなく、應じ得らるゝ事なら、何とか挨拶の爲様もあるから、兎に角話して呉れちやア如何かね。」

「はい。」と、元二は尙もじくと躊躇つて居たが、口籠りながらも、「御祖母さんが云つたんですが——僕も無論同意なんです——美都子の事に就いて、先生へ能く御相談を願へつて云ふんですが……。」と、また後を云はぬ。

「それで、其主意と云ふのは。」

「え、……先生の様な方に保護を願つて置いたら、長谷見たいな男が何を云つて來たッ

て、些ども心配する事は無いから、何卒さう願つて呉れうつて、御祖母さんが云ふのです。此様事を申すのは何だか……何だか馴々しくつて、僕には何も申されないんですけれども……先生、何卒悪く思つて下さらない様に願ひます。」

勝彌は早速に返辭を爲得ないのである。一人一人を保護すると云ふ事は、容易ならぬ大事だ。而も、自分は一介の養生ではないか。柏木家の人々の性質を能くも知らずして、迂濶に諾否の答を爲べきではない。美都子は實に美しい可憐の乙女であるのに、彼の父母が長谷如き者の詭辯に乘せられて、祖母と兄との保護も終に其効なきに到つたら如何であらう。何の汚染もない白糸の如き乙女が、一旦墮落の淵に沈んだら、容易に浮上がる事は出来まい。さうなつたら、當人の不幸は云ふ迄もなく、彼の祖母此兄の悲歎はどれほどであらう。自分に一人保護し得る力があるなら、何とでも爲たいと思ふが……いや輕忽に諾否を決すべき事ではない。充分熟慮に熟慮を重ねた上でなければ、何とも挨拶の爲様も無い。先づそれ迄は、何れとも返辭を爲まいと思つて見た。

けれども、また思ふと、斷然謝絶つて了つた方が可い。また自分の今の身分としては、

此様な事に携はるべきでない。断じて謝絶すべしだとも思つた。

けれども、此祖母の千代乃と云ふ老婦人が、僅かに一面の識ですらないのに、其愛孫の保護を自分へ托したいと望むのを思ふと、美都子の上を何程心配して居るのか知れぬ。のみならず、如何に其危険が切迫して居るかも察しられる。自分の様な者——僅かに一面の識より無い自分の様な者を見掛けて、其愛孫を托したいと云ふのは、自分を如何見たのであらう！。彼老婦人が自分如き者を、唯一の保護者として頼まうと云ふ點から考へると、依頼するに足るほどの人が、彼の知人の中に一人も無い事も想像される。それと察しながら、無下に謝絶すると云ふのも、何だか餘り頼まれ申妻も無い様だ。はて如何したものであらう。今謝絶するとしたら、元二が何程失望するか知れぬ。彼の老婦人も何程失望するか知れぬ。はて如何したものであらうか。今断然謝絶するが可か。熟考の間を伸ばして置くが可いか。はて何としたものであらうと、決しかねて思煩つて居た。

元二は勝彌が祖母と自分の希望を承引いて呉れるか、それとも却けて相手になつて呉れぬか、何方の答を得られるかと、何となく心細くなつて、思案に垂向いて居る勝彌の横顔を、心配さうに目成つて居た。

勝彌は暫時してから、

「元二君、君の依頼は、僕に取つて大事件なんだから、今即答する事は出来なない。兎に角、へては見るけれども、何しろ大負擔だからぬえ。」

「さうですか。併し、」と、暫時考へてから「御祖母さんは是非お願ひする様にして、くれぐれも申したんですよ。」

「御祖母さんが是非と云はれても、僕にも事情があるものだからぬえ。」

「御道理です。併し、」と、元二は後を云續けやうとしたが、何と思つたか語を断つて了つた。

「元二君。」

「はら。」

「美都子さんを保護して呉れ、はい保護しませうツて、假に僕が承諾したとしてだね、美都子さんを如何すれば可いのかね——何様方法を取れば可いのかね。僕には第一其點が容

易に思得られない難問題なんだ。君、如何すれば美都子さんを保護し得らるゝだらうか。君は其點を如何考へて居るのかね。」

「それですか。」と、元二は顔を赧めてもじ／＼して何とも云ひ得ない。

「保護／＼して口で云ふのは容易だけれど、さて其手段はと考へると、なか／＼其が容易で無いんで、君なり御祖母さんなりの考案があるだらうから、其手段なり方法なりを試みに説いて見て呉れまいかね。僕が承諾するか謝絶するかは先づ別問題として、大いに參考になるだらうと思ふんだよ。」

「それは結局……つまり貴方に貰つて戴くんです。」と、元二は眞赤になりながら思切つて云つて了つた。

「僕に貰つて呉れ……僕の妻にかね。」と、勝彌は覺えず眼を丸くした。

「御祖母さんが然様云つてるんです。僕も然様なれば、非常に難有いと思ふんです。」と、

元二は垂頭いたま／＼斯う云つて、靜かに頭を上げながら勝彌の顔を見た。

勝彌は覺えず微笑むで、

「それは意外だ。僕には第一、御祖母さんの意中が解されない。」

「如何していせう。」と、元二は不審の眉を顰めた。

「如何してと云つて、僕が君の御祖母さんに逢つたのは昨夜が初對面なんだよ。而も碌々談話を爲たと云ふのでもないんだよ。それなのに、唯一面識でさへ無い僕に愛孫を托する――美都子さんの一生を托しよう云ふのは、失敬だけれども餘り輕卒過ぎる様だね。」

「いゝえ、久能木先生なら大丈夫だと云つてるんです。」

「いや、それが輕卒なんだよ。僕が悪人だったら如何するかね。」

「そんな事があるもんですか。」と、元二は笑出した。

勝彌は態と眞面目で、

「君も僕を見損つてやしないか。僕は悪人かも知れないよ。」

「そんな事があるもんですか。」と、また笑ふ。

「いや、さうでなかつたら如何するかね。」と、勝彌は一入眞面目になつて、「御祖母さんにしても君にしても、人を信じ過ぎちやア不可ね。僕が實際悪人だったら、美都子さんは悲

「惨だよ。」

「大丈夫です、僕の御祖母さんが受合つてるんですもの。」

「それが可笑いんだ。御祖母さんが僕を如何見て——僕の如何なる點を見て、僕を其程信じて呉れてるんだか、僕とは一面識さへ無いんだよ。」

「ですが、御祖母さんは先生の御目を見て、確かな方と云つてるんです。」

「僕の眼を——僕の此可憐い眼を見て。」と、勝彌も覺えず笑ひ出した。

元二は勝彌の笑ふ顔を屹度見ながら、

「先生はお笑ひですが、僕の御祖母さんには、不思議に人を識る明があるんですよ。」

「けれども、僕を輕卒に信じて、」

「いゝえ、御祖母さんは輕卒に人を信じる様な人ではありません。母や父は如何にも輕卒でして、忽ち信じ忽ち貶すツて質ですが、御祖母さんは決して其様事は無いんですよ。僕の宅に現に出入りした人達に就いて、御祖母さんの爲した豫言が、今日まで一度も外れた事は無いんですから、御祖母さんが輕卒に先生を、」

「さうかも知れないが、兎に角僕に取つては終生の大事だから、今日直ぐに返辭する事は出来ない。君の御祖母さんに二三度逢つた上で、それには御父さんや御母さんの意嚮を確めんきやアならんしね。」

「僕の兩親は云ふに足らんですから、」

「君は何を言ふ。」と、屹度元二を睨んで、「御父さんや御母さんを云ふに足らんとは何の事だ。子たる分際として、父母を侮蔑した言を吐くとは怪しからんぢやアないか。」

「僕が悪う御座んした。」と、元二は素直に謝して、暫時垂首いて居たが、「併し、先生、僕は何です、また先生に叱られるかも知れませんが、僕は如何しても兩親を信用する事が出来ないんです……叱らずに聞いて下さる様に願ひます……僕ばかりぢやアないです、御祖母さんも信用して居ません、美都子も信用して居ないんです。僕の家が今の境遇に零落したのも、兩親の爲なんです。美都子が始終危険の地に置かれやうとして居るのも、兩親の爲なんです。兩親が今少し自重して、徐かに利害を考へて呉れる様でしたら、御祖母さんにしても僕にしても、今日の苦痛も見なければ、美都子の爲に痛心しないんですけれども……」

…先生、御祖母さんや僕が先生に無理にお頼り申したい氣になるのも、他に頼むべき人も、相談すべき人も無いからなんです。斯う申すと、他に人があれば頼まないが、無いから頼むんだらうッて…先生が左様思つてお居でなさると云のではありませんけれども、萬一其様疑念でも懐いて下さる様ですと、僕は實に残念です。先生、御祖母さんは何時でも僕に云つて居るんです、私が斯うして居る中は、美都子を父さんや母さんの自由にはさせないけれども、私が居なくなつた後では、何様悲惨な目に逢ふか知れない。其れが實に可哀相だから、今の中に、此人はと見込んだ人に嫁りたいッて云つて居るんです。ですから、昨夜先生にお目に掛つて、先生ならばと思つたから、それで僕にも相談した上で、早速お願いする事になつたんです。先生、美都子は素直な娘です。僕の口から妹を賣めるのは變です。僕に妹を救得る力があればですが、御存知の通り今日の境遇ですから、唯心配するばかりで、何と詮議も無いんですから、實に残念で、と、ほろりと涙を零して、「先生、今直に御承諾を願ひたいとは申しませんが、何卒祖母や僕の苦衷を御酌み下さつて、妹の前途を保

護して下さいる様に願ひたいのです。」

勝彌は頻りに首肯しながら聞いて居たが、

「よろしい。僕は充分考へた上で、二三日内に挨拶を爲しよう。けれども、君の御両親を度外に置く譯には行かんから、其邊も能く考へて見た上で、確と返辭を爲やう。兎に角、二三日待つて呉れたまへ。」

「はい。」と、元二は餘り迫るのは却つて感觸を害しはせまいかと思つて、再び口説かうとは爲なかつた。

其處にお須壽が林國雄からの郵書を持つて來て、

「もうお晝飯を上つても可いでせう。」

「うん。可いだらう。柏木君のも頼むよ。」

「はう。」

お須壽は階下へ行く。勝彌は林の手紙を讀んで居た。

(一〇)

お須壽は勝彌が元二と心安くなると共に、其家に入入りする様になつて、此二三日は別して家に落着かない様子が見え、今日も林の家へ行くから、留守に林が来たら、其事を云つて呉れる様にと云置いて、そこへ出掛けて行つた。

「如何したつて云ふんだらう、些も宅に沈着いて居らッしやらないんだもの……もしか私が推量つてる様な事になつたら、私如何したら可いだらう。」

お須壽は勝彌が出て行つた後の室内を片付けながら新う呟いて、覺えず涙含んだ。

「屹度、彼の妹さんに、おいで〜を極められてるんだは。憎らしい。」と、家外の方を屹度睨む様に見返つた。

すると、階段を上つて来る二人ほどの足音が爲たので、お須壽は勝彌が其邊で元二か林かに出會つて引返して来たのかも知れぬと耳を澄すと、足音が近くと共に、

「久能木先生の部屋は突當ですわね。」

と云つたのは、聞いた事がある様で、さて思出せない男の聲だ。續いて聞こえるは權二の聲で、

「さうなんだ。先生今居るか知ら。聞いて見たまへ。」

「久能木先生お居ですか。」

「御留守ですよ。何方で居らつしやいます。」

お須壽が其名を聞いて置いて、勝彌が歸つたら話を爲ようと、内から開を開ると、彼の小川水鏡が權二と共に立つて居た。

「お留守ですか。」と、水鏡は念の爲にと云ひたさうに室内を差覗いて、「眞箇お居でなさんですわね。」

「はい。先程お出掛で御座ましたよ。貴方は小川さんで居らッしやいましたね。」

「さうです。お歸宿でしたら、小川が太田先生の御使で伺ひましたと云つて下さい。」

権二はお須壽の顔を見てにや／＼笑つて居たが、

「須ちゃん、久能木君の部屋に入つて何を爲て居たんだ。」

「片付けて居たんです。」

「駄目だよ、須ちゃんが其様に親切に爲て遣つたつて。」と、権二は尙ほにや／＼や笑ひながら、「久能木君は轉宿するんだせ。」

「えッ」と、お須壽は吃驚して、「本當ですか。」

「本當も虚構もありやアしない。僕は久能木君が轉宿する家で聞いて來たんだ。」

「轉宿なさる先のお家ツて、何處なんですか。」と、勉めて語調を押鎮めた意で云つた。

権二は嘲ける様な眼を爲しながら、

「話すから僕の部屋へ來たまへ。小川君、君も話して行つても可いだらう。久振で逢つたんだから、寛話して行きたまへ。」

権二に續いて水鏡も室の中に入つた。お須壽は権二がまた平素の傳で調戲ふのではないかと疑がはれもするし、勝彌がこの兩三日の様子から思ふと、権二の語が不審らしくもある

し、入らうか入るまいかと暫時躊躇つて居たが、ごちらにしても轉宿する其先の家の名を聞いて見たくてならぬから、入口に膝を突きながら、

「久能木さんの御轉宿なさる家は何處なんですか。」

「何處つて彼の柏木さ。」

「えつ、あの。」とばかりで、お須壽は自分が或は其様事になりはせぬかと危んで居た其が、愈よ事實になりさうなので、唯眼を睜つたばかりで、何とも語が出なかつた。

「須ちゃんか油断してるから、此様事になるんだ。柏木には美都子つて、元二の妹の美人が居るんだよ。」

「それは、貴方に伺つて知つてますけども……。」と、後が云へないのみか、胸が一杯になり、睨が熱くなつて、もう涙が溢れさうになつたから、突と立上つて、「今お火を持つて参りますよ。」

云ふや否や廊下をばた／＼と駆出して、階下へ行つて了つた。お須壽が階下へ行く足音を聞きながら、水鏡はけいんな顔付。

「今の女は如何したんです。泣出しさうな顔を爲て行つて了つたぢやありませんか。彼女は此家の娘なんぞせう。」

権二は首肯しながら、「此家の娘のお須壽と云ふんだ。彼女め久能木に思ひがあるんだから、鳥渡調戲つて遣つたんだ。」

「妙ですな。久能木氏もなか／＼艶福家ですな。へへへ。大いに妙ですな。」

「妙つて事も無いがね。彼女め、久能木にはかりちやほやしやがつて瀧に墜るんだ。君が居なさやア、今少時留めといて、泣して遣るんだつて。」

「ちやア、久能木氏の轉宿なるものは、君が假に譲けて復讐の方便に使つたんですね。」

「いや、其は事實なんだ。」と、権二は頭を振つて、「久能木が、柏木と云ふ僕の友人の家に轉宿するのは事實なんだ。久能木からは聞かんが、柏木で聞いて来たんだ。明日久能木先生が移つてお出でなさるからつてんで、墨を拭いたり、障子を張替へたり、大騒ぎを爲て居る始末さ。」

「左様ですか。」

水鏡は勝堂が柏木とやらの人々から、何故に聞くが如き尊敬を受けるのかと羨しくもあり訝しくもある。殊に何とやら美人の娘が居ると云ふのだから、其間に何か深い意味があるらしい氣がして、今少し委しく聞いて見たくなつた。

水鏡は體をむづ／＼させながら

「で、何ですか、美人の妹とかあるつても事實なんですか。」

「事實だとも。」

「事實ですつて。」と、水鏡はまた乗出して、

「實際美人なんですか。」

「實際だとも。それは何だせ、恐く彼位の美人は、新橋あたりを探したつて容易にありやしまひ。」

「驚くですな。」と、うつ／＼心になつて、「年は。」

「たしか十六だ。いや、十六は去年だつたから、十七になつたんだね。華族の姫さん達にだつて、美都子位な美人は容易にあるまいね。」

「愈よ驚くですな。美人で以て、年が十七……美都子さんと云ふんですな。どうでせう、見る譯には行んでせうか。」

「どうさねえ。君は久能木を知ってるんだから、先生が移轉つたら遊に行けば可いちやないか。」

「それも然様ですなア。」と、水鏡はそれでは物足りない様な気が爲ながら、「柏木ッて人は君の友人だとかお云ひでしたな。」

「どう。」と、権二は火の氣が無いので、背中をむづ／＼着物に擦付け／＼、劇しく手を打さながら、「火は如何したと云ふんだらう。」

水鏡は火などは如何でも可いと云ふ風で、

「其柏木君に御紹介は願へんでせうか。」

権二は思はず笑出して、

「君は其だから困る。婦人と聞く目が無いんだから、先般の様な不都合も起るんだ。」

「君も知ってるんですか。」と、水鏡も流石に頭を掻く。

「知つてるとも。君の信用は彼一件から地を拂つて、居處にも困つてたと云ふのに、其にも懲りないんだね。」

「どう云ふ譯ぢやないです。併し、」と権二を見て異様な笑を含みながら、「そんな美人を、久能木君に専有されるのは残念でせう。」

「なアに、さう極つたと云ふんぢやなしさ。見て居たまへ、久能木が彼囃に誘寄せられて、早晩に馬鹿を見るから。」

「え、囃ですッて。」と、眼を丸くして、

「其様手のある女ですか。」

「なアに、美都子は初心なんだがね、家庭が亂れて居て御話にならないんだ。」

「家庭が亂れてる。其も妙ですな。」

「なに妙な事があるもんかね。君は如何も其だから困る。」

「いえ、僕は丁度、其様家庭を研究して見たいと思つてたところなんです。亂れてるッて、何様鹽梅式なんです。」

水鏡は権二の返辭を待たれども、唯笑つて居て答へないから、一入好奇心を發して、又膝を進め、

「兒玉君、さつとで可いから話して下さいな。僕は大きいに研究した上で材料に使つて、一つ傑作を書きたいと思ふんです。可いでしやう、話して下さいな。」

「ちやア、話さう。」

其處に下婢のお花がやつと火を持つて來た。

「乃公が入れるから貸すが可い。」

権二はお花から十能を受取り、火を火鉢に埋れながら、

「須ちゃんは何して居る。」

「茶の間にお居てなさいませう。」

「泣いてたいらう。」

「うんぬん。」

「いゝえな事があるもんか。御母さんを取捕まへて、愚痴を言してるんだらう。」

お花は唯笑つて居る。

「おい、さうだらう……何故黙つてるんだ。」

「私知りませんもの。」

「隠してやがるな。そらッ。」

権二が突出す様に置いた十能を、お花は持つより逃げる様に階下へ行つた。

権二は笑ひながら、

「お須毒め、大いに御袋を責めてるに見える。」

「さうですかア。」と、水鏡はお須毒が何故に久能木の事から母親を責めるのか、其仔細も聞きたいけれども、それよりは柏木の事を一入早く知りたいので、「柏木家の話は、如何なんです。其方を早く伺はうちやありませんか。」

「お、然様だッけ。ちやア話さう。」

権二は柏木の人々の性質から、込入つた家庭の有様を、悪い方に尾に尾を附けて話して、「……だもの君、久能木だッて、一月も過ちや直ぐ可厭になつたッて、また此家へ逆戻

る。

「さうですか。御祖母さん云ふのが、尊大で而も没分曉で、兩親が慾張りで、兄が懶怠で、叔父が馬鹿と來てるんですな。」

「如何だい君、驚くだらう。」

「さうです。併し、と、水鏡は仔細らしく小首を傾げながら、「美人の美都子さんに缺點は無いんでせう。」

「さうな。だけれども無愛想だね。」

「無愛想位は止むを得んでせう。僅かに十七の處女だつて云ふぢやありませんか。君、如何でせう、僕を其兄さんに紹介して下さる譯には行かんでせうか。」

「そりや困るよ。」

「君に御迷惑を掛ける様な事は、誓つて爲んですがなア。」

「僕は御免を被むる。」

「いかんですか。」と、さも失望したらしく太息を吐いて、「唯紹介して下さるだけで、」

「いや、御免を蒙むる。」

「さうですか。能さうなものだと思ふんですけれど。いかんですかなア。」

「君の様な危険な人物、注意人物の紹介は眞平だ。」

「ぢや、詮方が無いです。」と、怨めしうな顔を爲ながら太息を吐く。

権二は笑ひながら、

「久能木に頼んで見ぢやア如何だい。」

「彼先生は尙ほ駄目です。」

「それ見たまへ。僕ばかりぢや無いぢやないか。」

「最う諦めるです。」と、暫時黙つて居たが、何を思付いたのか莞爾笑つて、「僕は久能木先生の門下生にならうと思ふが、如何でせう。」

「それは君の隨意さ。併し、君は先刻外で逢つた時、今は太田紫瘦の門下生だつてと云つたぢやアないか。」

「なアに、彼は一時の糊口の爲なんで、僕が心から師と仰いでるんぢやアないんです。」

「ぢやア、久能木の門下生になるのも、美人に近きたい一時の方何なんだね。」
水鏡は笑ひながら頭を掻いて、

「其様事を云ツちやア不可ですなア。」

権二も水鏡に對しては、自分が聖人の様な氣でも爲るのか眉を顰せた。

「君には實に驚くよ。」

「ですが、久能木君に先刻からの事を云つて下さつちや困るですよ。」

権二は首肯さ、

「それは云はんけれども、注意しないと失敗するよ。」

「如何せ失敗してゐるんですからなア。」

「實に爲様が無いね。」

水鏡は紫瘦から急いで歸る様にと命ぜられて居た事を思出したので、突如に権二に暇を告げ、階下の茶の間を差覗き、自分が太田の使に來た事を、勝彌が歸宿したら傳言して呉れる様に、お須壽に頼んで置いて辭し去つた。

(一一)

勝彌は幾度か躊躇したけれども、終に柏木の千代乃と元二との請を容れて美都子の保護者となる事に決心した。尤も、直ちに貰受けて妻に爲ようと云ふのではないが、とにかく先づ柏木の家同居して、其上の成行に依りて、何れにも決しよう云ふ意で終に承諾を與へて、明日は彼方へ轉宿するとまで既に協議が進んで居る。

で、林國雄へは是非とも話して置かねばならぬと思ひ、今朝しも其牛込赤城下の家を訪うて其事を話すと、林は大反對で、君にも似合んぢやアないか。其様馬鹿な事をと、最初は眞面目に耳をかさなかつた程だ。

「馬鹿な事かも知れん。僕に似合ん軽率な事かも知れん。併し、僕は既に約束して了つたから、今更故なく取消す譯に行かんのだ。」

「故なくぢやアない、大いに故ありぢやアないか。君は柏木の七人からの家族を、君の其

瘦腕で……僕は敢て瘦腕と云ふね。君、さうだらう。つい先日まで、下宿料にも差支へた君がだね、僅かに一篇の小説を新聞社が買ったからと云つて、直ぐに増長するとは何だ……なに増長しないと……いや増長してる。僕は君を思ふから無禮な言も吐くんだよ。君、柏木の一少女が可哀相だからと云つて、直ぐに其保護者となるのは餘り軽率ぢやないか。君は君自身を何と思つてるんだ。君は大いに文藝の爲に努力する意だつて、僕に話した事を忘れたのか。蒼川君、君は一婦人の爲に志望を捨て、

「待て。」と、勝彌は友の語を支へて、「僕は一旦起した志望を捨てる様な男ぢやアない。」
「けれども、君は柏木一家を君の力で支へて行かうと云ふんだもの、如何して眞面目に文藝の爲に努力する事が出来るものか。生活の必要から濫作も爲んさやアならなくなるし、下げんでも済む頭を下げて、原稿を賣つて歩かなさやアならなくなると、自分で満足する様な大作は、到底出来る事ツぢやアないよ。君、既に同居して了つてからだど面倒になるから、今の内に斷つて了ふが可い。君が斷るのに都合が悪さやア、僕が代理になつて出掛けて行つても可い。」

「難有う。君の忠告は僕も大に謝する。併し、僕が一人で柏木の家計を負担するんぢやアない。今の下宿の山田に居るのと同一に、相當の下宿料を拂ふ約束なんだ。」

「約束は然様かも知れんが、それが不可のだ。」と、林は冷かな笑を浮べて、「君の性質として、自分さへ好きやア可い、同居してる家が困難して居ても關はんと云つて居られるか
501

「……………」

「君は人の困難を傍観して居得る人ぢやア無いんだ。人間として君見たいな性質は、實に嘉すべきだけれども、自分と云ふものも省んさやア不可よ。君、寧ろ其少女を妻に貰つちや如何だ。君の趣味に合つてる婦人なら、寧ろ貰つて了ふが可いんだ。それならば僕にも異論はない。君が今日、妻を養つて行く事が出来るや否やは疑問だけれども、併し、柏木に同居して、何方つかすの煮切らない、一歩過れば自滅を招く様な生活に入るよりも、遙かに勝しぢやアないかと思ふんだ。君、寧ろ然様したら可いだらう。其が其婦人の祖母なり兄なりの、最初の希望だと云ふんぢやアないか。それならば、僕も兎に角賛成する。」

勝彌は頭を振つて、

「そりや不可。」

「何故だね。」

「今美都子を娶ふのは、強いる様なもんだから不可さ。」

「強ると云ふのは。」

「だつて強いるんぢやアないか。」

「いや、先方の希望を容れる事になるんだ。」

「祖母と兄に對しては然様だ。併し、美都子が僕を好まんかつたら強いる事になる。僕は其様結婚は好まんのだ。」

「さう。併し。」

「いや、僕の云ふ事を先ア聞きたまへ。」と、勝彌は堅く腕を組んで屹度園雄を見た。

勝彌は紙巻煙に火を點けて、其を喫むでもなく其煙の長閑に變遷くのを凝視めながら、

「僕が美都子を直ぐに娶ふと云つたら、君の云ふ通祖母と兄とは喜んで承諾するだらう

し、美都子にしても否とは云はんかも知れんさ。併し、其が美都子の本意であるか如何か知れんぢやアないか。祖母と兄とに勧誘られて否と云はないのは、祖母と兄とに對して餘儀なく服従するのであつて、僕に對する愛などは無論無いものと思はなきやアならない。君にしても、其様結婚は爲たくないだらう。」

「して見ると、君は何だね、兎に角柏木に同居して、其中に美都子を導いて、自分を愛する様に爲たいと云ふんだね。」

勝彌は微笑みながら、

「君が然様思ふなら思ふ通に爲て置かうさ。併し、美都子が僕を愛して呉れんでも構はない。よしまた美都子が僕を愛したとしても、或は僕が美都子を愛さんかも知れない。とすると、到底結婚は出来ないんだから、僕は其點には重を置いて居ないんだ。」

「君は不可よ。」と、園雄は冷笑ふ。

「僕が不可と。」

「不可さ。君は心にも無い事を……いや、全然無いとは云はないが、多少飾つて話してるか

ら、』

「怪しからん。僕は其様男ぢやない。」

「でも、其様漠然とした事で、君は君の生涯の或時代を犠牲に供するのかね。」

「さう。僕は唯彼少女を或時まで保護し得れば、其で満足なんだ。」

「それが、君が然様云ふ其心が、僕には如何にも解されるのだ。蒼川君、君は何ぢやアないか。君は其少女に戀を爲て居るから、前後の分別も爲んで、好んで危地に踏入らうとしてゐるんぢやアないか。」

「さア、其は僕にも能く分らない。さうでない、其様意志は無いとは、自分ながら云難い様な氣が爲るから、或ひは戀してゐるのかも知れない。併し何だ、僕は語を飾るのではないがね、僕は盲目にはならん意だ。後悔する様な事は決して爲ん意だから、君、決して心配して呉れたまふな。」

「君は如何かしてゐるよ。」と、國雄は覺えず太息を吐いた。

「さう。如何かしてゐるかも知れない。併し、人一個を保護し得て、惡漢の手に渡さない」と

云ふ事は、君の思つてゐるほど満らな思ふ。僕の生涯の一部分を犠牲にして、可憐な少女一人救ふと云ふ事は、僕は決して後悔すべき事ぢやないと思ふ。僕は幸ひに緊要が無いから、成功すると否とは期し難いけれども、大いに努力して見やうと思ふんだ。君の忠告は謝するに餘りあるけれども、一旦決心して承諾を與へたからには、遣る所まで遣らして見て呉れたまへ。」

勝彌が其決心を到底翻へしさうも無いので、國雄も今は是迄と、再び諫めやうとはしなかつた。

「君決して悪く思つて呉れたまふな。僕の性質を知つてゐる君だから、兎に角行くところまで行かせて呉れたまへ。或ひは僕の後悔に了るかも知れないけれども、其も説方が無いさ。けれども、君の氣付いた事は、今後も遠慮なく注意して呉れたまへ。僕は眞箇如何か爲てるかも知れんさ、多少危む意が發りながらも、何しても決心が翻へせんのだからねえ。」

勝彌は尙ほ多少國雄の思惑を氣遣つて居るので、斯う云つて其顔を見ると、國雄は唯點頭のみで何にも云はぬ。

「僕は今夜か明日轉宿する意だ。四谷の船町の、角に鯉屋のある横町を一町ばかり入ると左側だから、通知したら直ぐ遊に來て呉れたまへ。」

勝彌は林の家を辭して、飯田町の山田へ歸つて來た。二階へ上る序に茶の間を差覗くと、お喜とお須壽の母子が火鉢を間に何か話して居たところで、二人が見返つた顔付が平素とは違つて居る。

「須壽さん、火を頼む。」

言捨て二階へ上り行く勝彌を、今日は不思議にも呼止めやうとも爲ないのである。

勝彌が自分の部屋に入ると間もなく、お須壽が臺十能に火を運んで來て、何にも云はないで火鉢に埋けるのである。

勝彌は直ぐにお須壽の平素と變つた様子に氣が付いたけれども、何故であらうとは思ひ得ず、また思得ようとも思はなかつた。が、お須壽が眼に一杯涙を湛えて居るのを見ると、有繋に見過しも爲かねて、

「須壽さん、如何かしたのかい。」

「如何も爲て居やしません。」と、膝にぼとりと一滴零とした。

「御母さんと喧嘩したんぢやアないかい。」

「いへへ。」

「どうかね。でも、何だか變だね。」

「貴方に左様見えるんですか。」と、怨めしうに凝乎と見たまゝ立上つて、何にも云はないで部屋を出て行く時、襦袢の袖で涙を拭いた。

「何したと云ふんだらう。何だか變だなア。」

勝彌は何故にお須壽が眼に涙を有つて居るのか、それが自分に關係して居ようとは、些も思得ないのである。お須壽が朝夕意を用ゐて世話して呉れるのを嬉しいと思つて居ないのではないが、彼が自分へ戀ひして居ようなどとは、全然氣付ずに居たのである。で、お須壽の涙と自分とは何の交渉もないものと思ふのであるが、唯怨めしうな眼を爲て凝乎と自分を見た時の様子には、何か意味があるらしく考へられたので、頻りに首を傾げて居ると、隣室から廊下へ人の出た足音と共に、權二の聲で、

「久能木君、お歸宿でしたか。」

「今歸つた處です。」

「伺つても可いませうか。」

「さア、お入んなさい。」

「失敬。」

權二は室内へ入つて來ると、にこ／＼笑ひながら火鉢の向に坐つて、

「君、いよ／＼柏木へ轉宿なさるさうですね。」

「さうです。」

「何時ですか。」

「今夜の積ですが、明日になるかも知れません。」

權二は意味ありさうな眼を爲ながら勝彌を見て、

「君が幾月辛棒が出来るでせうか知ら。」

「辛棒が出来んけりやア、其時他へ移るだけの事です。」

勝彌が如何にも平然として居るので、權二は忌々しい様な氣がして、

「僕が同居して居た時の経験を、君の参考までにお話爲て置かうと思ふですが。」

「いや、其は止して下さい。」

「え、聞きたくないと云ふんですか。」と、權二はむつとした體だ。

「僕は聞かない方が可いと思ふんです。」と、勝彌は微笑みながら、「君の好意は謝するです

が、僕は何にも頭に有たないで、極無邪氣で柏木家へ行きたいんです。君から聞いていると

所謂先入主と成つて、何でもない事までも其に當嵌めて行くから、意外な結果を來たしは

せんかと思ふんです。ですから、善惡に拘はらず何にも聞かないで、極無邪氣に、頭を空

に爲て置いて、僕の感じた所に従つて、彼家の人に對したいと思ふから、君へは失敬の様

だけれども、僕は聞かない事を望むんです。」

「僕だつて、強てお話爲ようと云ふんぢやアない。」と、權二は面白からぬ顔を爲る。

「久能木さん。」

何時の間に部屋の外に來て居たのか、お花が呼掛けて、